

日露経済協力・人的交流に資する 人材育成プラットフォーム(HaRP)

Human Resource Development Platform for Japan-
Russia Economic Cooperation and Personnel Exchange

Платформа подготовки кадров для японо-
российского экономического сотрудничества и
гуманитарных обменов

ANNUAL REPORT 2020

(April 2020 - March 2021)

ご挨拶

「日露経済協力・人材交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」事業は、北海道大学と新潟大学が平成29年度文部科学省「大学の世界展開力強化事業～ロシア等との大学間交流形成支援～(タイプB:プラットフォーム構築プログラム)」に共同申請の上、採択されてスタートし、令和2年度末で4年目が終了しました。

今年度は、新型コロナウイルスの世界的な流行という未曾有の事態となり、日露大学協会加盟校をはじめ、関係者の皆様も、日露の人材育成・人的交流の実施の在り方を模索する1年であったかと思えます。

このような状況の中、HaRPの各種活動についても、皆様の御協力を得て、各専門セクションに関連するセミナーや円卓会議および日露人材交流委員会の開催、日露学生連盟の学生による同連盟の規約案作成など、本事業の各分野における日露交流を本年度は特にオンラインを駆使して行い、プラットフォーム構築を推進することが出来ました。

特筆すべきこととしては、専門セクションでは、これまで、2016年の日露首脳会談において示された「8項目の協力プラン」の一つとして「エネルギー開発」セクションの活動を進めてきましたが、エネルギー開発のみならず、資源を含めた環境、文化など地球規模で対応すべき喫緊の課題であるSDGsの達成に貢献する専門人材の育成を日露間でも重視して推進すべく、「SDGs:環境・資源開発・多文化教育」に改編をいたしました。そして、この新しい専門セクション関連のシンポジウム1件を含む6件のイベントをロシア側の大学と共催し、6件合わせて、日露双方から500名以上の参加を得ることができ、プラットフォームとしての活動を充実させることができました。

また、日露人材交流委員会においては、事業最終年度である令和3年度に策定を予定している日露大学間の単位互換ガイドラインの作成に着手し、日本国内で会議を開き、コンピテンスやネットワーク形式の概念に基づく日露大学間の教育プログラムについて、議論を重ねました。

本年1月末に開催した「第3回日露産官学連携実務者会議」では、日露交流を行う大学(日本の大学23校、ロシアの大学47校)を含め、文部科学省、経済産業省、関係企業・団体等、日本側31機関、ロシア側57機関から前回は上回る185名の参加を得て、本年度のHaRPの諸活動を振り返りつつ、今後のキャリア支援やプラットフォーム構築を展望しました。

次年度は、第3回日露大学協会総会の開催が予定されております。日露交流に取り組む皆様にとって更に有益な場となるよう、精励する所存でございます。今後も、日露両国間のプラットフォーム構築の推進を進めて参りますので、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

令和3年3月

北海道大学 理事・副学長 横田 篤

目次

1. 事業開始からの活動内容一覧	4p
2. 日露大学協会総会	5p
3. 日露人材交流委員会	6p
4. 専門セクション	12p
5. 日露学生連盟	45p
6. 日露産官学連携実務者会議	56p
7. HaRP事業へのメッセージ	
・ 日本貿易振興機構(ジェトロ)	64p
・ キャリアバンク	66p
・ アルタイ国立大学	68p
・ ハバロフスク地方行政投資・企業促進局	69p
【付録】	
大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート	70p



1

HaRP これまでの活動内容

2017年度	北海道大学と新潟大学が平成29年度文部科学省「大学の世界展開力強化事業～ロシア等との大学間交流形成支援～(タイプBプラットフォーム構築プログラム)に共同申請し、採択される。
2018年4月	ロシア学長連盟会議の開催(於:サンクトペテルブルグ) 「日露医学医療交流コンソーシアムにいがた」の設立
5月	第1回日露大学協会総会、日露学生フォーラム、及び日露人社フォーラムの開催 (主催:北海道大学) 「人材交流委員会」「学生連盟」「専門セクション運営委員会及び専門セクション」の設立
7月～9月	日本の大学における人材交流委員会参画者の照会・決定 日露大学協会日本側運営委員会の開催(メール会議)
2019年2月	第1回日露産官学連携実務者会議の開催 第1回人材交流委員会(幹事会)の開催
5月	モスクワ国立大学内に北海道大学・モスクワ国立大学共同オフィスの開設
6月	第2回日露人材交流委員会(幹事会)の開催(於:北海道大学東京オフィス)
7月	極東の産業振興セクション準備会の開催 (於:東京工業大学キャンパスイノベーションセンター東京)
9月	第2回日露大学協会総会及び日露学生フォーラムの開催(於:モスクワ国立大学) 第3回日露人材交流委員会の開催(於:モスクワ国立大学) 日露学術(旧人社)フォーラムの開催(於:モスクワ国立大学)
2020年1月	第2回日露産官学連携実務者会議の開催(於:筑波大学東京キャンパス) 第4回人材交流委員会の開催(於:筑波大学東京キャンパス) 先端技術協力専門セクション「人材育成に関する連絡会・意見交換会」の開催 (於:筑波大学東京キャンパス)
8月	専門セクション「エネルギー開発」を「SDGs:環境・資源開発・多文化教育」へ改編
11月	第5回日露人材交流委員会の開催(オンライン)
2021年1月	第6回日露人材交流委員会の開催(オンライン) 第3回日露産官学連携実務者の会議(オンライン)

2

日露大学協会総会

日露大学協会とは、日本とロシアの高等教育機関における大学間交流の推進、学生交流の増加などを目的とした、日露の大学による組織です。当初、日露それぞれ21大学(計42大学)の参画の下に設立が合意され、現在、下記の日露各27大学(計54大学)が参画しています。また、日露大学協会加盟校が参加して、1年半ごとに日露交互に開催している日露大学協会総会は、次回は2021年秋に開催予定です。

	日本側加盟大学	ロシア側加盟大学
1	北海道大学	モスクワ国立大学
2	東北大学	アルタイ国立大学
3	筑波大学	ベルゴロド国立大学
4	千葉大学	ヴォロネジ国立大学
5	東京外国語大学	極東連邦大学
6	東京工業大学	ロシア外務省付属外交アカデミー
7	新潟大学	カラシニコフ記念イジェフスク国立工科大学
8	信州大学	イルクーツク国立大学
9	金沢大学	カバルダ・バルカル国立大学
10	名古屋大学	カザン連邦大学
11	神戸大学	クラスノヤルスク国立医科大学
12	広島大学	クバン国立工科大学
13	山口大学	モスクワ国立国際関係大学
14	長崎大学	ロバチェフスキー記念ニジニーノヴゴロド国立大学
15	大分大学	ノヴォシビルスク国立大学
16	福島県立医科大学	セチェノフ第一モスクワ国立医科大学
17	神戸外国語大学	グブキン記念ロシア国立石油ガス大学
18	白鷗大学	ロシア新大学
19	東海大学	リャザン国立大学
20	上智大学	サラトフ国立大学
21	創価大学	サハリン国立大学
22	東京農業大学	北東連邦大学
23	早稲田大学	北方(北極圏)連邦大学
24	南山大学	太平洋国立医科大学
25	京都外国語大学	太平洋国立大学
26	近畿大学	南ウラル国立大学
27	神戸学院大学	南方連邦大学

(順不同)

3

日露人材交流委員会

プラットフォームには、二つの委員会を置いており、その内の一つが日露人材交流委員会です。人材交流委員会は、以下の三つの目的のために設置・運営されます。

- 日露大学間の交流の拡大と発展に資する人材育成のための学生交流の支援
- 日露大学間の単位互換及び学位認定などの教育制度の調整に係る検討
- 日露大学協会と連携した日露大学間の交流の促進

以上の三つの目的の実現のために、委員会は以下の活動に取り組みます。

- ① 日露間の学生交流にかかる「優れた取り組み(Good Practice)」の共有と発信
- ② 大学院レベル等での共同教育プログラムの推進
- ③ 大学間の単位認定及び学位授与制度の比較検討
- ④ 日露学生連盟に対する支援

活動内容については、1年半ごとに開かれる日露大学協会総会で報告を行い、事業の最終年度には日露の両国政府に対して、日露の高等教育システムの在り方に関する提言書を取りまとめ、提言することをゴールとして想定しています。

また今年度は、第5回、第6回人材交流委員会幹事会を行い、日露大学間の単位互換制度のガイドライン策定にむけて議論を行いました。

人材交流委員会委員(日本の大学)

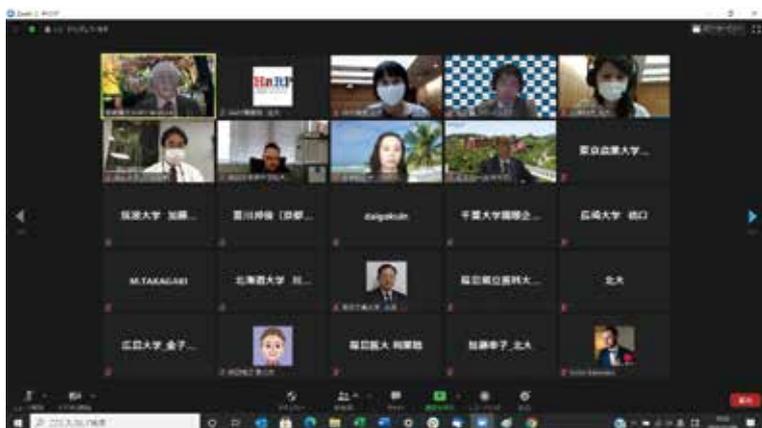
NO.	大学名(和文)	参画形態	所属(和文)	役職(和文)	氏名(和文)	備考
1	◎北海道大学	幹事委員	アイヌ・先住民 研究センター	教授	加藤 博文	
2	新潟大学		国際連携推進本部	准教授	山川 詩保子	
3	筑波大学		人文社会系	教授	加藤 百合	
4	金沢大学		理工研究 域数物科学系	教授	松本 宏一	
5	長崎大学		医歯薬学総合研究科	教授	高村 昇	
6	東海大学		国際教育センター, 工学部	国際教育センター所長, 工学部教授	山本 佳男	
7	京都外国語大学		外国語学部 ロシア語学科	教授	菱川 邦俊	
8	東北大学	委員	大学院文学研究科	教授(副研究科長・ 国際交流室長)	阿部 恒之	
9	千葉大学		国際教養学部	教授	高垣 美智子	
10	東京外国語大学		大学院総合国際学 研究院	教授	沼野 恭子	
11	東京工業大学		科学技術創成研究院 先導原子力研究所	教授	小原 徹	
12	広島大学		—	副学長(国際グロー バル化推進担当)	金子 慎治	
13	神戸市外国語大学		外国語学部 ロシア語学科	教授	金子 百合子	
14	上智大学		—	グローバル化 推進担当副学長	杉村 美紀	
15	創価大学		グローバル・コア・ センター	副学長	田中 亮平	
16	南山大学		—	副学長(国際担当)	星野 昌裕	
17	近畿大学		グローバルエデュケー ションセンター	特任講師	松下 聖	
18	神戸学院大学		国際協力センター	所長(教授)	岡部 芳彦	
19	福島県立医科大学		—	副学長	山下 俊一	長崎大学学長特別補佐を 兼任
20	東京農業大学		国際協力センター	副センター長	丹羽 光一	

2020年10月現在

第5回 日露人材交流委員会

令和2年11月6日(金), 第5回日露人材交流委員会が初めてオンラインで開催され, 日本側大学の日露人材交流委員会幹事5名, 委員10名及び事務担当者23名の計38名が参加し, 当委員会の目標の1つである「日露大学間における単位互換に関するガイドラインの作成」について, 目次案の討議を行いました。

委員会の始めには, 当委員会委員長の北海道大学 加藤博文教授より, ロシアの高等教育制度や大学教育改革について説明があり, 日露間の様々な教育制度の差異を確認するとともに, 北海道大学において準備しているガイドラインの内容について, これまでの人材交流委員会で議論と確認できた課題を踏まえて, (1)日露大学間の教育システムの差異, (2)日露間の単位互換の取組みの現状と課題, (3)ロシアにおけるボローニャ・プロセスの導入事例と海外の大学の共同学位制度の紹介, (4)コンピテンスを基礎とした単位互換の提案, としたい旨, 説明があり, これに則した目次案でガイドラインを作成することが合意されました。



日露人材交流委員会では初のオンラインでの会議となった。



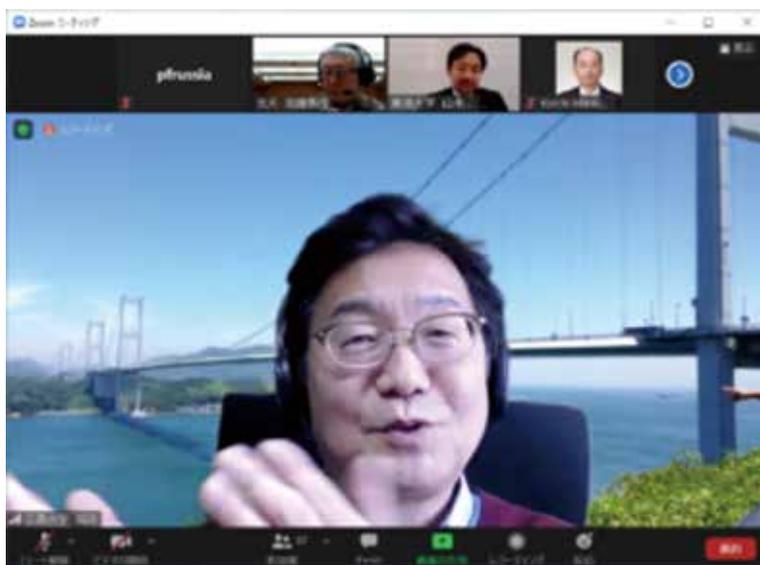
ロシアの高等教育制度について説明をする北海道大学, 加藤博文教授。

第6回 日露人材交流委員会

令和3年1月20日(水)、第6回日露人材交流委員会が開催され、日本側大学の日露人材交流委員会幹事7名、委員8名及び事務担当者25名の計40名が参加し、オンラインで行われました。今回の会議では、現在、当委員会で行っている日露大学間における単位互換に係るガイドラインの内容について、前回の委員会で承認された構成を基に内容を充実させたものを提示する一方で、本ガイドラインの目的や、利用方法などの再確認をしました。さらに、翌週に控えた第3回日露産官学連携実務者会議における当委員会の活動報告の内容及び、今後の委員会のスケジュール等の確認をした後、日露大学間の単位互換について、活発な討議を行いました。



議事進行する当委員長の
北海道大学 加藤博文 教授



単位互換について説明する
広島大学 堀田泰司 教授

オンライン会議「コロナ禍における日露国際教育交流の実践」

北海道大学は、2020年11月20日(金)にモスクワ国立大学と共催で、オンライン会議「コロナ禍における日露国際教育交流の実践」を開催しました。

本会議は、コロナ禍において、対面による国際教育交流が実施できない中、各大学がどのように日露間の国際教育交流を実践しているか、事例を共有・分析することで今後の日露国際教育交流のあり方を展望することを目的として実施されました。

本会議は、日露同時・逐次通訳の形で行われ、北海道大学横田理事・副学長、文部科学省高等教育局吉岡専門官の挨拶の後、日本側大学からは、新潟大学及び長崎大学から、医学分野におけるロシアとのオンライン教育交流の取組について、また、近畿大学による「ものづくり」分野における同様の取組についての発表がありました。続いて、北海道大学モスクワオフィスより、オンライン教育推進に向けたロシア連邦科学高等教育省とロシアの大学の連携について紹介しました。



北海道大学 横田理事・副学長の挨拶

ロシア側大学からは、モスクワ国立大学のオンライン授業推進・入試実施の取組、北極圏国立農工大学及びウラル連邦大学よりオンラインによる国際教育プログラム実施事例の発表がありました。また、ノヴォシビルスク国立大学、高等経済学院、サンクトペテルブルク国立映画テレビ大学より各大学の取組紹介が行われました。



モスクワ国立大学 Raevskiy准教授の発表



モデレーターの北海道大学 加藤 博文教授

その後の質疑応答・意見交換セッションでは、オンライン教育実施により、様々な地域から学生が参加できることや、教員・講演者の遠隔参加が可能となったという利点が共有されるとともに、参加学生間のコミュニケーション不足の解消、実習・実験授業のオンライン化の工夫、単位を伴う形でのオンライン教育実施の実現、といった今後の課題が明確になり、引き続きオンライン会議等にて議論を行っていくことになりました。

この会議には、日露の大学(日本側21大学,ロシア側30大学)から約130名が参加し、終了後には「有益な事例共有であった」「今後のオンライン教育実施の参考としたい」といった感想が寄せられました。

なお、本オンライン会議は、日露大学協会、日露地域・姉妹都市交流年事業行事としても認定され実施されました。

また、本オンライン会議の動画については、以下からご覧いただけます。

日本語版動画：<https://www.youtube.com/watch?v=cwxvzze6BB0>

ロシア語版動画：<https://www.youtube.com/watch?v=kSysLy8nwTg>

4 専門セクション

専門セクションは、2016年の日露首脳間で合意した「8つの経済協力プラン」に沿って、日露の経済発展・交流促進に資する人材育成を目的として設置され、(1)医療健康、(2)都市づくり、(3)中小企業交流、(4)SDGs:環境・資源開発・多文化教育(当初、エネルギー開発であったが、同分野をカバーする領域の拡充を目的として2020年8月に改編)、(5)産業多様化促進、(6)極東の産業振興、(7)先端技術協力、(8)言語・文化・観光において、日露の経済協力・発展に資する専門的な人材を育成することを目的として、日露両国における産学官の各界により構成される組織です。

HaRPでは、日露の大学、企業、自治体等多様な組織と協働する人材育成に関する取組みを奨励し、セクション内はもちろん、セクションをまたいで協働する取組みをより重要と考えています。また、HaRPが蓄積する日露人材育成の取組みやカウンターパートに関する情報を利用し、経済協力に資する高度専門家育成への積極的な参画を期待します。

専門セクションへの参画状況

セクション名	参画大学(参画者の所属大学)
①医療健康	新潟大学(リーダー校)、北海道大学、筑波大学、金沢大学、長崎大学、東海大学、福島県立医科大学
②都市づくり	北海道大学(リーダー校)、東京大学、新潟大学、長岡技術科学大学、札幌市立大学
③中小企業交流	北海道大学(リーダー校)、金沢大学、創価大学、大阪大学、小樽商科大学、札幌大谷大学
④SDGs: 環境・資源開発・ 多文化教育	北海道大学(リーダー校)、東海大学、金沢大学、東海大学、神戸市外国語大学、室蘭工業大学
⑤産業多様化促進	北海道大学(リーダー校)、小樽商科大学、札幌大谷大学
⑥極東の産業振興	新潟大学(リーダー校)、北海道大学、千葉大学、金沢大学、小樽商科大学、大阪大学、東京農業大学
⑦先端技術協力	金沢大学(リーダー校)、北海道大学、東京工業大学、東海大学、近畿大学、室蘭工業大学、大阪大学
⑧言語・文化・観光	北海道大学(リーダー校)、東北大学、東京外国語大学、新潟大学、神戸市外国語大学、東海大学、上智大学、創価大学、神戸学院大学、小樽商科大学、大阪大学、札幌市立大学、札幌大学、公立はこだて未来大学

2020年11月現在

専門セクション活動報告書

・新潟大学	医療健康①
・長崎大学	医療健康②
・近畿大学	中小企業交流
・金沢大学	先端技術協力
・東京外国語大学	言語・文化・観光①
・北海道大学	言語・文化・観光②
・セクション全体	複数セクションにわたる活動①
・セクション全体	複数セクションにわたる活動②
・セクション全体	複数セクションにわたる活動③

専門セッション活動報告書(医療健康①)

イベント名	日露共同オンライン医学講義
開催時期	2020年12月9日(水), 10日(木), 11日(金)
開催場所	Zoomを介したオンライン形式にて開催
主催者	新潟大学, クラスノヤルスク医科大学
参加者	・新潟大学, クラスノヤルスク医科大学, 長崎大学, 筑波大学の医学系教員 ・日露の医学系学生
活動内容	<p>医療健康セッション(主催:新潟大学, クラスノヤルスク医科大学)では, 2020年12月9日(水)から11日(金)にかけ, 日露の医学生向けに最先端の医学研究や臨床技術を紹介する「日露共同オンライン医学講義」を実施しました。</p> <p>同講義は, コロナ禍により, 日露の人的な国際交流が進みづらい中, オンライン講義という形式を利用することで, 日露両国の学生に国際的な学びの機会を提供することを目的に企画されました。日本からは, 本セッションに参画する長崎大学と筑波大学からも講義が提供されました。</p> <p>講義においては, 日露の大学が1日1講義ずつ, 3日間で計6回, 各分野の第一線で活躍する医科学者, 外科医らが英語で講義を行いました。講義テーマは, 神経生物・解剖学, 臨床心理学, 原爆後障害医療, 微生物学, 心臓血管外科, 放射線診断と多岐にわたり, 基礎医学から臨床技術の最新情報に至るまで, 幅広い分野を網羅する試みとなりました。</p> <p>講義後には, チャット機能を介した学生からの質問も受け付けられ, 日露の学生と教員とが, 英語で活発なやり取りをする様子も頻繁にみられました。各回とも, 300人前後, 3日間で延べ約1,600名の参加者があり, 学生たちは, 普段触れる機会の少ない日本やロシアの医学講義に, 熱心に耳を傾けていました。</p> <p>後日, 参加者向けに実施された事後アンケート調査においては, 回答者全員が講義内容について, 「大変満足した」もしくは「満足した」と回答しており, 対面式の講義に限らず, オンラインを利用した医学講義においても, 学生にとって, 有意義な経験が蓄積されることが示されました。日露の学生, 教員双方より, 翌年度以降においても, 講義を継続実施してほしいという強い要望が寄せられており, 日露医学教育の新たな共同体制が構築されたといえます。</p> <p>加えて, 各分野の専門家による講義を最大限に活用するべきとの声に応え, 講義内容を録画の上, 医学生向けにアーカイブ化し, 日露の関係者が閲覧可能なURLサイトにて, 公開する仕組みも取り入れられました。今回の企画を一過性の取り組みに終わらせることなく, 講義終了後も, 多くの学生に学習機会を確保する結果に発展させることができました。</p>

【演題・演者の一覧】

◆"Mechanism of neural development: importance of basic science"

Hirohide TAKEBAYASHI, Professor, Division of Neurobiology and Anatomy, Niigata University

◆"Learned helplessness and somatic health"

Olesya V. VOLKOVA, Lecturer, Department of the Clinical Psychology and Psychotherapy, Krasnoyarsk State Medical University

◆"Health effects of radiation: lessons from Nagasaki, Chernobyl and Fukushima"

Noboru TAKAMURA, Professor, Atomic Bomb Disease Institute, Nagasaki University

◆"The role of MRSA in the development of infectious diseases"

Olga E. KHOHLOVA, Lecturer, Department of Microbiology, Krasnoyarsk State Medical University

◆"Utility of 3-D model of the heart in cardiac surgery with complicated morphology"

Yasuyuki SUZUKI, Professor, Department of Cardiovascular Surgery, The University of Tsukuba

◆"Transcatheter aortic valve replacement: is there any room for surgery? "

Alexey V. PROTOPOPOV, Professor, Department of Radiation Diagnostics, Krasnoyarsk State Medical University



日露の医学生向けに講義をする
新潟大・竹林浩秀教授



長崎, チェルノブイリ, 福島の事例を挙げ, 放射能に関する講義をした高村昇・長崎大教授



3Dモデルを活用した心臓外科手術について
教授する鈴木保之・筑波大教授

関連URL

<https://www.niigata-u.ac.jp/news/2020/81063/>
<https://www.niigata-u.ac.jp/en/information/4731/>

専門セッション活動報告書(医療健康②)

イベント名	長崎大学川内村オンライン実習および福島県立医科大学救急医学オンライン実習
開催時期	2020年10月
開催場所	福島県川内村(オンライン)
主催者	長崎大学, 福島県立医科大学
参加者	北西医科大学修士学生

活動内容

長崎大学, 福島大学と北西医科大学(サンクトペテルブルク)は, 2019年度から災害・被ばく医療科学分野の日露, さらにはグローバル人材の育成を図るためにジョイントディグリープログラムを構築中である。現在, 単位互換の拡大を進めてる。2018年度から長崎大学が北西医科大学の修士学生に放射線防護学やリスクコミュニケーション学といった科目の提供を開始し, 北西科大学は長崎大学, 福島県立医科大学の学生に生物統計学といった科目を提供している。2019年度からは, 長崎大学が復興推進拠点を設置している福島県双葉郡川内村において, 長崎大学が「長崎大学川内村実習」を, 福島県立医科大学が「福島医大救急医学実習」を北西医科大学の学生に提供を開始した。2019年10月に行った実習では, 長崎大学, 福島県立医科大学, 北西医科大学の学生が約2週間川内村に滞在して実習を行った。日露の学生は, 「長崎大学川内村実習」において食品検査場での食品中の放射性セシウム測定, 住民宅での環境放射能測定, 個人被ばく線量評価とそれらをもとにしたリスクコミュニケーション実習を行った。さらに, 「福島医大救急医学実習」では, 放射線災害時の救急医学, メンタルヘルス, クライシスコミュニケーション, 放射線防護の原則等について学び, 最後に川内村の消防局員と合同で実習訓練を行った。



しかしながら2020年度は, 新型コロナウイルス感染症の拡大のために人の移動が制限され, 北西医科大学の学生が来日することができなくなり, また長崎大学, 福島医科大学の修士学生は看護師や診療放射線技師など医療従事者が大半を占めているため, 長期間の宿泊を伴う実習への参加は難しい状況となった。

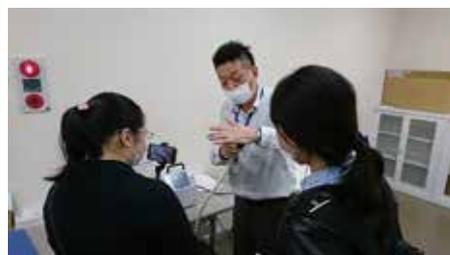
そこで本年度は, 川内村での実習をオンラインとすることとし, 長崎大学のスタッフが川内村から学生に映像を配信した。さらに, せっかくのオンライン配信を有効に活用するために, 世界の被ばく医療科学分野の若手研究者に実習を公開することとした。世界保健機関(WHO)を通じてオンライン実習についての告知を行ったところ, 世界中の研究者120名ほどから応募があり, 従来よりもより多くの参加者が集う実習となった。



「川内村オンライン実習」のポスター。海外からの参加者はQRコードから参加登録を行った。

「川内村オンライン実習」の実施本部(左)と川内村遠藤雄幸村長による講義

「川内村オンライン実習」の期間中は村内に実施本部を設置し、川内村の遠藤雄幸村長の講義等は実施本部で行った。一方、川内村に隣接する富岡町の食品検査場での説明や、川内村住民の被ばく線量測定、リスクコミュニケーションについては、長崎大学のスタッフが現場を訪問し、動画を撮影して実施本部を經由して配信した。



富岡町の食品検査場実習の動画配信

日露の学生と日本と比較的時差に近い国からの参加者はリアルタイムで実習に参加したが、ヨーロッパやアメリカ大陸からの参加者に対しては、ビデオをウェブ上にアップロードしてVOD (Video on Demand)形式で配信した。

最終日には、日露の学生と参加希望者がリアルタイムでディスカッションを行い、実習の総括を行った。参加者の中には放射線防護学の分野で著名な研究者もおり、日露の学生にとっては大いに刺激になったと思われる。



日露学生、世界の研究者によるオンラインでのディスカッション

2020年度は新型コロナ禍で教育分野でも制限が多かったが、我々の「川内村実習」はこの制限を逆手にとって、日露の学生のみならず世界中の研究者がオンラインで実習に参加することを可能にした。今後もしばらくはこの状況が継続することが予想されるが、オンラインをうまく活用することによって、より効果的な日露学生への教育の可能性を探ることが期待される。

関連URL

<http://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/fukushima/columns/>

専門セッション活動報告書(中小企業交流)

イベント名	近大・ロシアものづくり学生フォーラム
開催時期	2021年2月16日～2月19日
開催場所	オンライン
主催者	近畿大学の世界展開力強化事業(ロシア)
参加者	近畿大学学生, ロシア協定校の学生, 教職員など約100名
活動内容	<p>近畿大学では大学の世界展開力強化事業(ロシア)の採択後, ロシアの理工系大学との交流を積極的に展開し, 短期人材交流プログラムや交換留学プログラムを実施してきた。しかし, 新型コロナウイルスの影響により海外との往来が制限され, 例年通りの交流プログラムが実施できない状況となった。そのため本年は, オンラインで近大生とロシア人学生と一緒に学び, 交流するプログラム「近大・ロシアものづくり学生フォーラム」を開催することとなった。</p> <p>本プログラムは事前学習とワークショップの2部に分けて行った。事前学習においては産業界より講師を招き, 『ロシアと日本のビジネス環境』(講師: 日本貿易振興機構サンクトペテルブルク所長 一瀬友太 氏), 『ロシアにおける自動車製造・販売の現状』(講師: 豊田通商ロシア代表 栗原正史 氏, JV «Business Car» Co.Ltd 阿部企晴 氏)の2つのオンラインセミナーを受講し, 日本とロシアのビジネス関係の全体像および, ロシアにおけるエンジニアリング, マーケティングを学んだ。</p> <p>第2部のワークショップでは, 本学とロシアの大学からの参加学生が9つの混合チームを作り, 「日本またはロシアで売れる製品(またはサービス)を考える」というテーマに従いオンラインでプレゼンテーションやディスカッションを行い, その成果を全体セッションで発表した。ロシアからはモスクワ国立大, モスクワ工業物理大, ドゥブナ大, ドン工科大, チュメニ大, カザン連邦大, 極東連邦大の7大学から計59名, 近畿大学からは理工学部, 国際学部, 工学部, 生物理工学研究科の4学部・研究科から計30名の学生が参加した。</p> <p>ワークショップに要した時間自体は2時間程度だが, 参加者はワークショップ実施前にコラボレーションツールのSlackへ登録し, 自己紹介や発表に向けた準備を, テキストチャットによって相互のコミュニケーションを取りつつ行っていた。そのため, 時差の大きな地域の学生同士でも, リアルタイムで接続した時間以上の交流を図ることができた。成果発表では, 文具からスマートウォッチを活用したアプリケーションまで, ものづくりの考え方に基づいたユニークな製品アイデアが発表された。発表後には, 本学客員教授の石川一洋氏らから, アイデアに対するフィードバックを行った。</p>

What does "Monodukuri" means?

<http://russiainkindaiforum.tilda.ws/>

The Japanese word *monodukuri* is a portmanteau of *mono*, meaning "things", and *dukuri*, meaning "making." *Mono* are products and other things that bring people joy. *Dukuri* is the work of processing materials and making these products for many people. But the word *monodukuri* doesn't just mean "making things". Inherent in *monodukuri* are the feelings, spirit, and acquired skills of the people who make things.

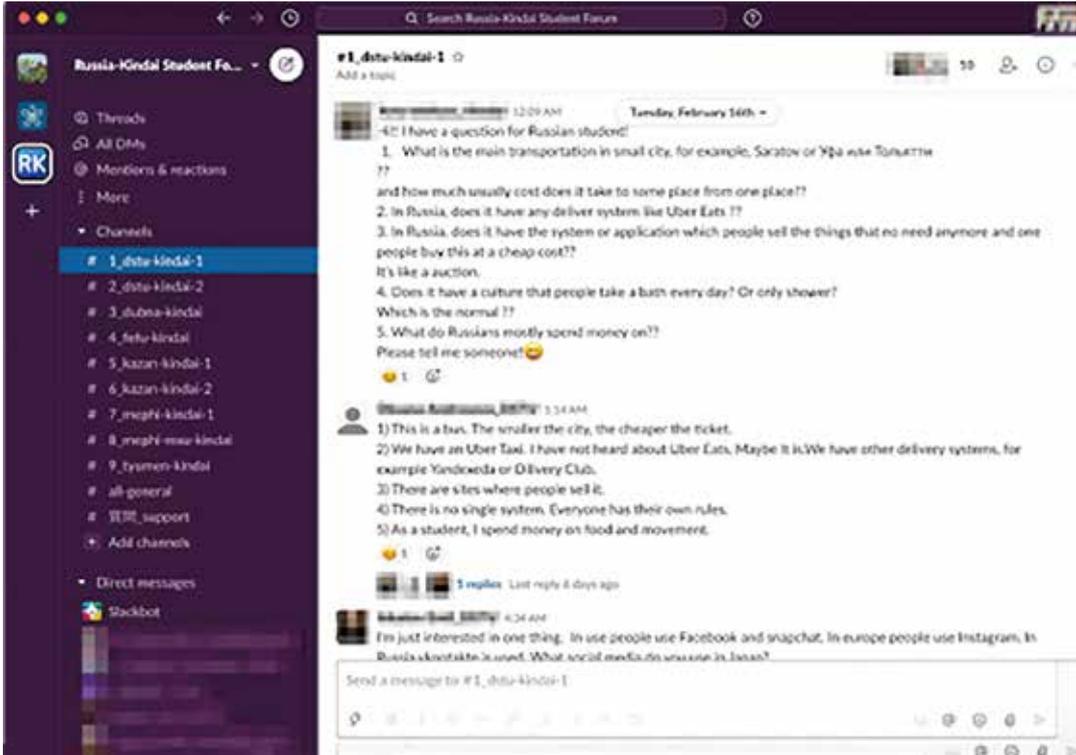



MONODUKURI at Kindai University



MONODUKURI at Kindai University

Zoom によるワークショップの様子



#1_dota-kindai-1

12:09 AM
 -Hi I have a question for Russian student!
 1. What is the main transportation in small city, for example, Saratov or Yga wie Tomsk??
 and how much usually cost does it take to some place from one place??
 2. In Russia, does it have any deliver system like Uber Eats ??
 3. In Russia, does it have the system or application which people sell the things that no need anymore and one people buy this at a cheap cost??
 It's like a auction.
 4. Does it have a culture that people take a bath every day? Or only shower?
 Which is the normal ??
 5. What do Russians mostly spend money on??
 Please tell me someone! 😊

1:34 AM
 1) This is a bus. The smaller the city, the cheaper the ticket.
 2) We have an Uber Taxi. I have not heard about Uber Eats. Maybe it is. We have other delivery systems, for example Yandexed or Delivery Club.
 3) There are sites where people sell it.
 4) There is no single system. Everyone has their own rules.
 5) As a student, I spend money on food and movement.

4:34 AM
 I'm just interested in one thing. In use people use Facebook and snapchat. In europe people use Instagram. In Russia what is the most used. What social media do you use in Japan?

コラボレーションツールSlackを使った学生同士のコミュニケーション

関連URL https://www.kindai.ac.jp/about-kindai/disclosure/research-funding/russia_manufact

専門セッション活動報告書(先端技術協力)

イベント名	オンラインによるアントレプレナー教育
開催時期	2020年11月17日～2021年1月31日
開催場所	オンライン
主催者	金沢大学 理工学域, 自然科学研究科
参加者	プログラム応募者:本学学生2名, ロシア協定校学生29名(イルクーツク国立大学, カザン連邦大学, 極東連邦大学) プログラム修了者:本学学生1名, ロシア協定校学生9名(イルクーツク国立大学, カザン連邦大学, 極東連邦大学)
活動内容	<p>11月中旬から1月末にかけて, 日露間をつなぐアントレプレナーが紹介する日本とロシアの様々な状況を理解するとともに, 起業の事例などを通じて国際起業家となる基礎を学ぶことを主題として, オンラインにてアントレプレナー講義を行った。</p> <p>本プログラムの受講対象は, 本学理工学域および自然科学研究科の学生とロシア協定校の学生とし, 募集を行った。</p> <p>プログラムの詳細は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月中旬より順次ビデオ教材(30分程度, 計8回)をアップロード。受講学生は期日までに視聴し, 質問や感想をGoogle formより提出。 ・12月～1月中旬にかけて, あらかじめ提出された質問を基に各ビデオ教材の講師とオンラインディスカッションを実施(1時間程度, 計8回)。ディスカッション後に講義の感想等をGoogle formより提出。 ・1月末に最終レポート提出。 ・所定の成績を修めた学生は, 本学学生には単位を与え(1単位), ロシア人学生には修了証を発行した。 <p>【講義内容】</p> <p>第1回 日露間での起業 ユナイテッド・マネージャーズ・ジャパン(株) 海外投資部長 大坪 祐介氏</p> <p>第2回 日本とロシアの経済関係 日本貿易振興機構(JETRO) モスクワ事務所長 梅津 哲也氏</p>

第3回 Vibraimage Technology changing the world
(株)Elsys Development director
Eugeniia Lobanova氏

第4回 日本の技術を企業化した事例
(株)マイクロエミッション 代表取締役
山本 保氏

第5回 like Pay 留学生の僕が、日本で起業した理由とは?
(株)LikePay 代表取締役
ヴォロシオフ・イーゴリ氏

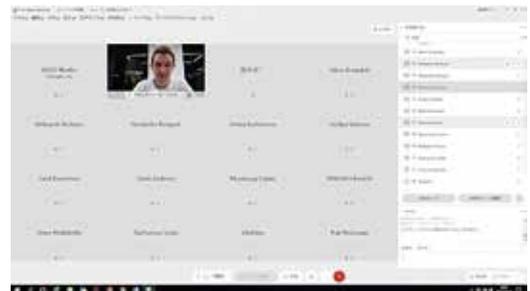
第6回 ベンチャー企業による海外事業展開
元SBIホールディングス コンサルタント
Victoria Shpakovskaya氏

第7回 アントレプレナーストーリー~日本人起業家とロシアの物語~
(株)TalentEx 代表取締役
越 陽二郎氏

第8回 Entrepreneurship in the rapidly changing global environment:
new opportunities and challenges
インベロ・アドバイザーズ株式会社 代表取締役
Tamerlan Abdikeev氏



オンラインディスカッションの様子
(Lecture 1)



オンラインディスカッションの様子
(Lecture 5)

前述の8名の講師に本学学生およびロシア人学生のオンラインインターンシップを提案したところ、(株)Elsys, (株)TalentEx, (株)LikePayの3社から受諾いただいた。

専門セッション活動報告書(言語・文化・観光①)

イベント名	RYATICOを受入企業とするインターンシップ
開催時期	2021年1月
開催場所	オンライン
主催者	RYATICO
参加者	東京外国語大学の学生3名
活動内容	<p>東京外国語大学の学生3名が、モスクワに本社を置くロシアの貿易会社 RYATICOが受入先のインターンシップに参加しました。すべてオンラインで行われました。以下に、同社の概要、経緯、インターンシップの内容について報告いたします。報告者は、東京外国語大学の新井滋特任教授です。同大が取り組む世界展開力強化事業(ロシア)のプログラムコーディネーターを務めています。</p> <p>1. RYATICOとは</p> <p>2018年に設立されたばかりの貿易会社です。この社名は“Russia”, ロシア語で日本を意味する“Yaponia”, “Technology”, “Investment”, “Company”の頭文字をとったもので、ロシアと主に日本及びアジア・太平洋地域との間のビジネスに取り組む目的で設立されました。</p> <p>会長はAlexey Repik氏。大手製薬会社 R-Pharmの創業者・会長です。ちなみに、R-Pharm社は2年前からロシア市場における富士フィルムの医療機器、サプリメントのロシア販売代理店となっています。また、Repik氏は経済団体「実業ロシア」の共同会長、そして日露間のビジネスマッチングを推進する「露日ビジネスカウンシル」の議長でもあります。社長は、Taishi Group(コンサルティング・貿易)代表の Igor Dyachenko氏で、「実業ロシア」の日本担当、そして「露日ビジネスカウンシル」の専務理事を兼務しています。二人とも日本との関わりが深く、頻りに日本を訪れておりましたので、日本のロシアビジネス関係者の中で広く名前が知られています。Ryaticoのオフィスは実業ロシア、露日ビジネスカウンシルと同じ建物内にあります。モスクワの地下鉄駅ツヴェトノイ・ブリバールから徒歩で約15分のところにあります。</p> <p>Ryaticoの主な事業は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">・原材料を除く ロシア産品の日本及びアジア太平洋諸国への輸出・ロシア産品を世界的なバリューチェーンに組み込むこと・日本の投資をロシアのインフラ整備とイノベーション事業に誘致すること <p>なお、2020年の8月に東京に支社を置き、日本との接点強化を図っています。</p> <p>同社は、ロシア法人SEABIKEの水上バイクの日本を含むアジア市場でのディストリビューターであり、名古屋に本社を置くMTGの製品(美容・ヘルスケア機器等)のロシアにおける販売代理店でもあります。また、鳥取県や茨城県といった日本の地方自治体との経済協力を進める取り組みも進めています。最も優先順位の高い事業は、ロシア産品の輸出、そしてロシアへの投資の呼び込みです。逆にロシア市場で人気を呼びそうな商品を発掘し、輸入販売することにも力を入れています。</p> <p>2. 経緯</p> <p>RyaticoのDyachenko氏と新井特任教授は、長年ビジネス上の付き合いがあり、その関係で2019年春から東京外大の交換留学生をインターンとして引き受けてもらうことになりました。東京外大は毎年計10~12名の学生をモスクワの4つの大学(モスクワ国立大学、モスクワ国立国際関係大学、ロシア国立人文大学、国立研究大学高等経済学院)に派遣(交換留学)しています。こうした学生の多くは日露間のビジネスに関心を持っており、参加学生1人当たり週1回のペースで</p>

1ヵ月間通うことを基本にスケジュールを組みました。残念ながらコロナ禍の影響で断念せざるを得ない学生もいましたが、2019年度は7名の学生が参加しました。なお、このインターンシップを実施するにあたり、大学、Ryatico、学生との間で、お金のやりとりは一切発生ありません。

3. インターンシップの内容

Ryaticoのロシア人担当者から学生に対し日露間の貿易に関連する様々な課題が与えられます。ある程度まとまった時間のリサーチが必要となります。

たとえば2019年度のインターンシップでは次のようなものがありました。

- ・ロシアの乳製品の日本への輸出を念頭に、日本サイドの規制など輸入条件
- ・ロシア製の家具を販売できる日本の通販サイトや家具チェーン店の情報
- ・シベリヤ鉄道を通じた貨物輸送の経済性とその実情

2021年1月にオンラインで実施されたインターンシップは、新井特任教授のビジネスロシア語の授業「駐在員のロシア語」のアクティブラーニングとして企画されたものです。「駐在員のロシア語」とは、学生が将来ビジネスパーソンとなってロシアに駐在することを想定し、現地語であるロシア語を駆使して仕事ができるようになることを目指した授業です。履修学生30名のうち3名がこのアクティブラーニングに参加しました。ズームミーティングを2回行いました。1回目は、RYATICO側から学生への課題提示で、2回目は成果発表と質疑応答です。基本的にすべてロシア語で行うことを前提としています。1回目のミーティングでRYATICOの担当者から学生に対して出された課題は、ロシアで売れそうな日本の商品、日本で売れそうなロシアの商品を探し出して紹介することでした。商品の紹介に当たっては、使用方法(食品なら食べ方)を含む詳細情報、日本あるいはロシアの市場で受け入れられる理由(魅力)、ターゲットオーディエンス(訴求する消費者)、価格帯、そして必要に応じてロジスティクス(輸送方法)の注意等が網羅されていることが求められました。これらについてパワーポイントにまとめ、各自持ち時間10分以内にロシア語で発表し、その後質疑応答に臨むことが課題となりました。

学生たちはネット情報を中心に約1～2週間かけてリサーチし、資料をまとめて発表に臨みました。2回目のミーティングで3人の学生は1人ずつ発表し、質疑応答をこなしました。RYATICO側からは概ね高い評価を得ることができました。学生が提案した商品群は次のとおりです。

(日本の商品)

- ① カリグラフィペン ② ラーメンのスープ(粉末)
- ③ 焼き芋(冷凍) ④ ネイルシール ⑤ 青汁

(ロシアの商品)

メドヴューハ(はちみつベースのアルコール飲料)

ロシアの商品は、残念ながら一つのみでした。実は、ある学生が「サーロ(豚の脂身の塩漬け)」を提案したのですが、サーロはもともとウクライナのものであり、健康志向が強まっているなか、脂肪分・塩分の多いサーロが日本市場で広く受け入れられる可能性は低いであろうとの判断で見送られました。

RYATICO自身が日本の学生を通じた情報収集に関心があることから、今後とも機会を見つけてインターンシップを継続することになっています。(以上)



対応したRYATICOのスタッフ



インターンシップの様子
(2019年度)



参加した3人の学生(2020年度)

関連URL

<https://www.niigata-u.ac.jp/news/2020/81063/>

専門セッション活動報告書(言語・文化・観光②)

イベント名	日本におけるロシア語教育:母語・継承語・外国語～若い世代の経験, 課題, 展望～
開催時期	2021年2月6日・7日
開催場所	オンラインで開催(北海道大学)
主催者	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院, HaRP, 日露大学協会, 日本ロシア語教育研究会, 日本ロシア語学校教師会
参加者	登録者:370人(北海道大学, 大阪大学, 神戸市外国語大学, 早稲田大学, サンクトペテルブルク国立大学, ノボシビルスク国立経済・経営大学, ノボシビルスク国立工科大学, イルクーツク国立大学, ヘルシンキ大学など)
活動内容	<p>2月6日(土)から7日(日)まで「日本におけるロシア語教育:母語・継承語・外国語～若い世代の経験, 課題, 展望～」国際シンポジウムを開催しました。</p> <p>今回本学で開催された国際シンポジウムには, 日本及びロシアの大学から大学生2名, 大学院生3名, 大学教員5名とロシア語教育に関わる市民団体代表3名が研究発表を行いました。また, 日本とロシアだけではなく, アメリカ合衆国やフィンランドからもロシア語教育の専門家が参加し, 基調講演をしました。ロシア語教育の問題を教師, 研修者, 保護者, 学習者の観点からディスカッションし, 研究・教育交流ができました。世界のロシア語教師, 研究者や学生など多くの人が発表を聴きに集まり, 活発な意見交換や今後の研究の展開について話し合いができました。</p> <p>本国際シンポジウムでは次の発表が行われました。</p> <p><u>2月6日(土) 外国語としてのロシア語</u></p> <p>「日本の中等教育における外国語としてのロシア語教育」 大阪大学准教授, 日本ロシア語教育研究会会長 横井幸子</p> <p>「日本人学生のロシア語学習における最低限の慣用句習得数～頻出数, 文体, 同意義性の問題～」 イルクーツク国立大学修士課程 阿部耕大</p> <p>「外国語としてのロシア語教育における統合型学習モデル～中等レベルにおける課外活動としてのプロジェクト・メソッド～」 神戸市外国語大学准教授 バイビコフ・エレナ</p> <p>「ロシア語発音の教育実習～大学の低学年の演習コースを例に～」 北海道大学助教 ブンティロフ・ゲオルギー</p> <p>「外国語としてのロシア語教育におけるビデオゲーム活用」 ノボシビルスク国立工科大学 博士課程 ゴルシュノヴァ・アンナ</p> <p>大学生の発表:「ロシア語学習経験について」 北海学園大学 柿崎愛深</p> <p>「若者の声は何を語るか～外国語としてのロシア語を学習する学生のインタ</p>

ビューを基に～」 北海学園大学ロシア語講師, 北海道大学大学院博士後期課程 サヴィヌイフ・アンナ

2月7日(日)母語・継承語としてのロシア語

「青少年のロシア語の保持・発達」 Vikaraskina Inc.のCEO兼共同創業者
ラスキナ・ヴィクトリア

「子どもバイリンガルのロシア語の形成・発達・保持における母親の役割」
ロシア語教師 ネロノバ・ナターリア

「日本在住のロシア語使用家族における子どもとのコミュニケーションの特徴」
富山高等専門学校ロシア語講師, 「オドゥワンチク」ロシア語学校主宰 武田
エレナ

「日本におけるロシア語学校・教室～現状と子どもバイリンガルのロシア語発達
における役割～」 北海道大学大学院博士後期課程, 札幌ロシア語学校教師
サヴィヌイフ・アンナ

「海外機関付属学校の高校生社会化～在東京ロシア連邦大使館付属学校を
例に～」 研究者 バソヴァ・オリガ

「日本在住の子どものロシア語教育におけるTORFLテストの可能性」 サнкт
ペテルブルグ大学語学試験センター 専門試験官 ドゥビニナ・ナデジダ,
外務省研修所ロシア語講師, 試験官 東 シャトヒナ・ガンナ

「文化を通しての言語教育」 ノボシビルスク国立経済・経営大学准教授 バク
ラノヴァ・エレナ, 成人教育センター(スペイン, マドリド)の学生 大島有可
大学生の発表:「言語習得の経験について」 早稲田大学 アルバレス・アレク
サンドラ

「『10年後』～土曜日学校の卒業生が自分の教育を評価する～」 北海道大学
准教授 パイチャゼ・スヴェトラナ

「彼らは誰なの?どのように話せるの?～アメリカ, イスラエル, ドイツ, フィンランド
の4カ国の青少年の比較～」 ヘルシンキ大学助教授 プロタソヴァ・エカテ
リーナ

今回のシンポジウムは日本におけるロシア語教育を行う大学のネットワークを
深め, 継続的な人材育成につなげることができたと考えられます。

また, 言語を通じて学生の多文化的な世界への理解を深めることもでき,
それは国際人材育成につながることで期待できます。

関連URL

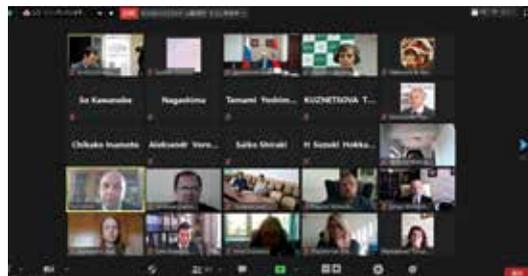
6日の発表の資料とビデオ <http://deti-bilingual.com/?p=2633>
7日の発表の資料とビデオ <http://deti-bilingual.com/?p=2642>

専門セッション活動報告書(複数セッションにわたる活動①)

イベント名	日露の大学・企業・地方自治体間のパートナーシップ
開催時期	2020年9月25日(金)
開催場所	オンライン
主催者	北海道大学, アルタイ国立大学
参加者	ロシアと日本を中心に6か国から日露の大学(ロシア側36校, 日本側7校, うち学生12名) 企業(日本側5社), シンクタンク(日本側2団体) 地方自治体含む政府機関(ロシア側3機関, 日本側2機関)から約130名
関連専門セッション	(2)都市づくり;(3)中小企業交流;(4)SDGs:環境・資源開発・多文化教育; (5)産業多様化促進; (6)極東の産業振興;(7)先端技術協力;(8)言語・文化・観光
活動内容	<p>2020年9月25日(金), 北海道大学とアルタイ国立大学は, アルタイ国立大学で開催された国際会議IV Congress of the Association of Asian Universities/International Educational Forum “Altai-Asia”の一部および日露地域交流年 2020-2021 記念イベントとして「日露の大学・企業・地方自治体間のパートナーシップ」と称する日露の産官学間パートナーシップに焦点を当てた円卓会議をオンラインにて開催しました。</p> <p>開会においては, Snesarアルタイ地方行政副知事からの祝辞に続いて, Ganshinロシア連邦教育科学省国際連携部部長及び佐藤文部科学省高等教育局主任大学改革官からいただいたメッセージを読み上げて紹介いたしました。続いて, Mazeiモスクワ国立大学副学長からの挨拶と, 川野辺北海道大学国際連携機構副機構長よりロシアとの大学の世界展開力強化事業「日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」の活動紹介を含む挨拶がなされました。</p>
	
	川野辺北海道大学国際連携機構副機構長の開会挨拶

会議においては、金沢大学、長崎大学、アルタイ国立大学、カザン連邦大学及びモスクワ国立大学の研究者より、各地域コンソーシアムにおける交流分野、利点、交流がはじまった経緯、専門家育成プログラムの資金調達と地域開発に及ぼす影響、注意点や解決策などを含む専門家育成のための地域コンソーシアムに関する優れた取組の発表が行われました。その後、大学・政府機関・企業関係者間の意見交換会で多くの日露連携の事例紹介がありました。

本イベントを通じ、参加者は、大学、地方自治体、民間企業を統合する地域コンソーシアムの課題や日露の大学・企業・地方自治体間の連携について専門家からの様々な事例から学ぶことができ、今後の連携における質向上のためのヒントやアイデアを得ました。



オンライン円卓会議「日露の大学・企業・地方自治体間のパートナーシップ」の様子



Raikinアルタイ国立大学副学長による閉会挨拶

関連URL

北海道大学HaRPホームページ

<https://russia-platform.oia.hokudai.ac.jp/report/3894>

アルタイ国立大学 ホームページ <https://www.asu.ru/news/events/38343/>

Re-port.ru社 ホームページ

https://re-port.ru/pressreleases/rossiisko-japonskii_kruglyi_stol_organizuyut_v_altgu/

ノヴォシビルスク国立建築デザイン芸術大学 ホームページ

<http://www.sibstrin.ru/news/cmd/5994/>

Российский новый университет社 ホームページ

<https://rosnou.ru/info-center/inform/rosnou-prinyal-uchastie-v-obsuzhdenii-partnerstva-mezhdu-rossiyskimi-i-yaponskimi-vuzami/>

カザン連邦大学 ホームページ

<https://media.kpfu.ru/news/sotrudnichestvo-kfu-i-yaponii-predstavleno-na-forume-altay-aziya>

カザン国立工科大学 ホームページ <https://www.kstu.ru/event.jsp?id=114633>

サンクトペテルブルグ国立大学 ホームページ

<http://www.econ.spbu.ru/ru/news-events/news/uchenye-ekonomisty-spbgu-prinyali-uchastie-v-obrazovatelnom-forume-altay-aziya-2020>

サラトフ国立農業大学 ホームページ

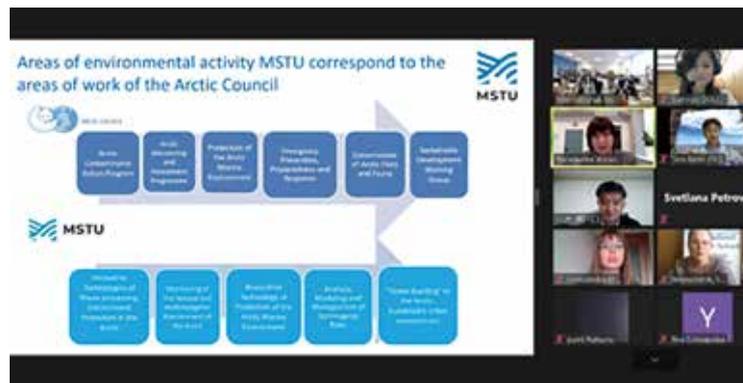
<http://www.econ.spbu.ru/ru/news-events/news/uchenye-ekonomisty-spbgu-prinyali-uchastie-v-obrazovatelnom-forume-altay-aziya-2020>

ヴォルゴグラード国立大学 ホームページ

https://volsu.ru/news_archive.php?ELEMENT_ID=36100

専門セッション活動報告書(複数セッションにわたる活動②)

イベント名	オンライン寒冷地セミナー「北方圏における日露連携」
開催時期	2020年9月30日(水)
開催場所	オンライン
主催者	北海道大学・北東連邦大学(ロシア)共同開催
参加者	日露の大学(ロシア側20校,日本側9校),企業(日本側2社),シンクタンク(日本側2団体,ロシア側4団体),NGO(ロシア側1団体),地方自治体含む政府機関(ロシア側3機関)
活動内容	<p>2020年9月30日(水),北海道大学と北東連邦大学は,ロシアのヤクーツクで開催されたNorthern Sustainable Development Forum(NSDF)の一部および日露地域交流年2020-2021記念イベントとしてオンライン寒冷地セミナー「北方圏における日露連携」と称するセミナーを共同で開催しました。</p> <p>セミナーはMikhail Prisyazhnyiサハ共和国科学教育局次長・北東連邦大学北方研究学科長の開会挨拶からはじまり,日露共同教育研究の事例として北海道大学低温科学研究所の杉山慎教授より北極域研究加速プロジェクト(ArCS-2 project)の基調講演をしていただきました。次に,北海道大学HaRP事務局のロマーエヴァ・マリーナ産官学連携コーディネーターより2020年8月に新設された専門セッションである「SDGs:環境・資源開発・多文化教育」セッションの紹介がありました。</p>
	 <p>The image is a screenshot from a video conference. It shows a man in a dark suit and red tie speaking at a podium. Behind him is a large presentation slide. The slide has a header in Russian: "ЦЕНТРАЛЬНЫЙ ОФИС ВЪ ВСТОЧНОЙ СИБИРИ" and "27-30 СЕНТЯБРЯ/ЯКУТСК". Below that, it says "ЦЕНТРАЛЬНЫЙ НАУЧНО-ОБРАЗОВАТЕЛЬНЫЙ ЦЕНТР 'СЕВЕР'". The main content of the slide is titled "Goals and Tasks of the Scientific and Educational Center 'North'" and lists "TARGET" and "TASKS". The "TASKS" section includes: "1. Identifying and commercializing the existing scientific and educational programs and activities of the scientific and educational center of the Far Eastern Federal District." and "2. Developing and implementing a program of scientific and educational activities of the scientific and educational center of the Far Eastern Federal District, including with the involvement of local partners." At the bottom of the slide, it says "УСКОЛЬСКОЕ ИСТОРИКО-КУЛЬТУРНО-НАУЧНОЕ ЦЕНТРЕ".</p>
	Prisyazhnyi北東連邦大学北方研究学科長によるご挨拶と発表
	<p>参加者は①北方圏環境,②北方圏コミュニティ,③北方圏社会経済開発,④寒冷地の建設技術とデザインの4つの分科会に分かれ,あらかじめ共有された各テーマの概要発表及び発表に対する質疑応答と意見交換を行いました。</p>



分科会④「寒冷地の建設技術とデザイン」発表者と参加者の様子

その後、参加者は全体会議に参加し、各分科会のモデレーター（①モスクワ国立大学の Olga Tutubalina 上級研究員、②北東連邦大学の Lena Sidorova 文化研究科准教授・北海道大学の Jeffrey Gayman メディア・コミュニケーション研究院教授、③北海道大学の 大塚夏彦 北極域研究センター副所長、④北海道大学の 瀬戸口剛 大学院工学研究院長）による内容の振り返りから学び、将来の日露共同研究事業の可能性などについて意見交換しました。

最後に、田畑伸一郎北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授と Prisyazhnyi 教授より閉会挨拶があり、本テーマに係る日露連携の今後の展望について情報共有しました。参加者は、北方圏の日露連携について専門家の研究事例から学び、今後の研究や実務における有益な情報を共有し、幅広く意見交換することができました。

このセミナーの参加者からは「司会進行、発表ともに知識意見の豊富な専門家で、参加者として大変にためになった」、「ロシアや日本の研究者と交流できた」、「多くの情報やアイデアを得ることができた」など肯定的な感想をいただきました。



田畑伸一郎北海道大学教授による閉会挨拶の様子

関連URL <https://russia-platform.oia.hokudai.ac.jp/report/3926>
<https://russia-platform.oia.hokudai.ac.jp/event/3709>

専門セッション活動報告書(複数セッションにわたる活動③)

イベント名	日露の大学・企業による共同人材育成事業-課題と展望-
開催時期	2020年10月9日(金)
開催場所	オンライン
主催者	北海道大学, ハバロフスク国立経済法科大学
参加者	日露の大学(日本側9校, ロシア側16校), 企業(日本側4社, ロシア側6社) シンクタンク(日本側3団体, ロシア側2団体), NGO(日本側1団体, ロシア側1団体) 地方自治体含む政府機関(日本側3機関, ロシア側5機関)から90名以上
関連専門セッション	(1)医療健康;(2)都市づくり;(3)中小企業交流;(4)SDGs:環境・資源開発・多文化教育; (5)産業多様化促進;(6)極東の産業振興;(7)先端技術協力;(8)言語・文化・観光
活動内容	<p>2020年10月9日(金), 北海道大学とハバロフスク国立経済法科大学は, 日露地域交流年2020-2021記念イベントとしてオンライン円卓会議「日露の大学・企業による共同人材育成事業－課題と展望」を共同開催しました。</p> <p>はじめに, Tarasovハバロフスク地方行政投資・起業促進局長からの挨拶とBuryi極東商工会代表及び石畠ハバロフスク日本センター長による基調講演が行われました。その後, Apkhanovaハバロフスク国立経済法科大学教員, Malovichkoハバロフスク国立経済法科大学国際部長, Kuznetsovaイルクーツク国立大学国際部国際事業コーディネーターより, ロシアの大学の日本企業との連携における成功事例の発表や, 新井東京外国語大学世界言語社会教育センター特任教授及び山本東京農業大学副学長より, 日本の大学とロシアの企業間の連携における成功事例の報告がありました。</p>
	 <p>石畠ハバロフスク日本センター長によるご挨拶</p>



Strizhak高等経済学院
世界経済政治学部東洋学科長による
同大学の日本企業UNIQLO社との連携事例発表



山本東京農業大学副学長による
温室栽培の連携事例の発表

意見交換会では、日露の大学や企業から上記の発表者の発表に対する質問やコメントの他、各団体が実施している事例紹介が行われました。最後に、北海道・ロシア地域間交流推進協議会座長を務める北海道大学スラブユーラシア研究センターの田畑教授より北海道大学や北海道庁などが実施している連携事業の紹介を含む閉会挨拶がなされました。

この会議を通じて、参加者の間で大学・企業との日露の人材育成共同事業の成功事例について情報共有するとともに、問題点、解決策、利点、成功要因などについて幅広く意見交換することができました。



ハバロフスク国立経済法科大学の参加者の様子

2020年度 専門セクションの活動(2021年3月現在)

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参画者の 氏名
(1) 医療健康	東海大学		<ul style="list-style-type: none"> ・極東連邦大学 ・サハリン国立大学 ・モスクワ国立大学 ・国立研究大学高等経済学院(HSE) ・極東国立医科大学 ・サハリン国立大学 ・極東連邦大学附属病院 ・北斗医療センター(ウラジオストク) ・北斗リハビリセンター(ウラジオストク)等 	<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県伊勢原市役所 ・未病センター(神奈川県) 	ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成に主として極東地域の経済発展を目的として	学生の相互派遣	学部修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 ・受入留学生:極東連邦大学(2020年10月～2021年2月:3名、2020年11月～2021年8月:1名)、高等経済学院(2020年10月～2021年2月:3名、2020年10月～2021年8月:1名)、サハリン国立大学(2020年10月～2021年2月:2名)、計10名。 オンライン短期プログラム:極東連邦大学・極東国立医科大学(2021年2月22名) ・派遣留学生:ロシアへの派遣実績はなし。 オンライン短期プログラム:極東連邦大学(2021年3月30名(予定)) ② 企業・地方自治体等との連携 2020年11月:ジョブフェア開催(2回)日露のビジネス経験者によるセミナー	山本 佳男
(1) 医療健康	長崎大学	被ばく医療	<ul style="list-style-type: none"> ・北西国立医科大学 ・(・ゴーマリ国立医科大学 ・ベラルーシ国立医科大学) 	<ul style="list-style-type: none"> ・福島県立医科大学 ・福島県川内村 ・福島県富岡町 ・福島県大熊町 ・原子力安全研究協会 ・アルハイム株式会社 	日露の大学間連携による災害・被ばく医療科学分野におけるリーダー育成事業	学生の相互派遣	修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 学生交流(オンライン講義及び実習) 本専攻:10月「リスクコミュニケーション学」/「長崎大川内村実習」・「救急医学実習」 12月「放射線防護学I・II」 ロシア北西医科大学:2月「生物統計学」 北西国立医科大学と長崎大学との間における学術交流協定 ② 企業・地方自治体等との連携 北西国立医科大学の留学生は災害・被ばく医療科学共同専攻学生と共にオンラインで福島県川内村の長崎大学 川内村復興推進拠点、一般社団法人 かわうちラボ、食品検査場(川内村及び富岡町)、東京電力 廃炉資料館及びふたば医療センターにおいてフィールド実習を行った。	高村 昇

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(1) 医療健康	新潟大学	医学・医療全般	・クラスノヤルスク国立医科大学 ・極東国立医科大学 ・北東連邦大学 ・サクトペタルブルク国立大学 ・太平洋国立医科大学 ・カザン連邦大学 ・カザン国立医科大学 ・モスクワ国立大学 ・モスクワ国立第一医科大学(セチェノフ大)	・新潟県 ・新潟市 ・環日本海経済研究所(ERINA) ・株式会社 第四銀行 ・三井物産株式会社(日露医学医療交流コンソーシアムにいがた)	日露の経済・産業発展に資するグローバル医療人材育成プログラムワークの構築(Japan-Russian G-MedEx Project, G-MedEx)	学生の派遣 その他(企業・地方自治体等(地域コンソーシアム)との連携)	学部 修士 博士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) ・講義を3大学の学生がオンライン共修 10月 リスクコミュニケーション学及び長崎大川内村実習(長崎大学)、 10月 救急医学実習(福島県立医科大学) 12月 放射線防護学Ⅰ・Ⅱ(長崎大学)、2月 生物統計学(北西国立医科大学) ・遠隔テレビ会議(日露3大学) ・HPの更新及び日本留学フェアへの参加等の広報活動を行った	山川 詩保 子
(1) 医療健康	福島県立医科大学	被ばく医療	・北西国立医科大学(ゴームリ国立医科大学) ・ベラルーシ国立医科大学)	長崎大学		学生の相互派遣	修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 (1)2020年10月、北西国立医大生8名に対して川内村救急医学のオンライン実習を実施(長崎大学と共同)。 (2)2021年2月に修士学生1名が北西国立医科大学の「生物統計学」をオンライン受講。単位互換を予定(長崎大学と共同)。 ② 企業・地方自治体等との連携 長崎大学 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) (1)北西国立医科大学との修士ダブルディグリープログラム実現に向けたオンライン会議(長崎大学と共同)。 (2)2020年11月に、ロシア極東地域、中央アジア地域向けの日本留学フェアに参加し、広報活動を実施。	和栗 聡

セッション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の 氏名
(1) 医療健康	金沢大学	・脳神経 科学 ・予防医 科学 ・がん医 科学 ・循環医 科学	・カザン連邦大学 ・クラスノヤルスク国立医科大学 ・サンクトペテルブルク国立第一医科大学 ・タタルスタン共和国がんセンター	理化学研究所	日露をつなぐ未来共創リーダーク育成プログラム(先制医療プログラム)	学生の相互 派遣	教員(研究交流) 博士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 世界展開力強化事業(ロシア)の「先制医療プログラム」における交流から波及し、2020年度は金沢大学交換留学プログラム(KUEP)において4月～9月に3名の学部生がクラスノヤルスク国立医科大学から留学を予定していたが、COVID-19の影響により中止となった。該当学生は2021年度4月より再度留学予定である。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 2017年度から実施している世界展開力強化事業(ロシア)の体系的で多層的な学生交流プログラム「先制医療プログラム」に2020年度はクラスノヤルスク国立医科大学、サンクトペテルブルク国立第一医科大学及びカザン連邦大学から博士課程学生が5名参加予定であったが、今年度はコロナ禍の影響によりラボローテーションが行えなかつたため、いくつかの講義教材を講義用の動画投稿サイトにあげ、それを閲覧・レポート提出という形で交流を行った。 また、2020年9月29日にはカザン連邦大学、クラスノヤルスク国立医科大学との共催でオンラインシンポジウムを開催し、金沢大学から博士課程の大学院生4名と教員が参加し、大学院生はオンラインにて発表を行った。また、このシンポジウムにはカザン連邦大学やクラスノヤルスク国立医科大学から教員・大学院生も参加し、活発な意見交換があった。今後の共同研究などに繋がることを期待される。	原 章規
(1) 医療健康	筑波大学		・ロシア国立研究医科大学 ・モスクワ国立大学 ・カザン連邦大学 ・ノヴォシビルスク国立医科大学 ・太平洋国立医科大学 ・ロシア各地の病院		ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム	その他(実習、実務研修)	学部(一部修士・博士)	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 2020年12月、日露の医学生を対象としたHaRP医療健康セッション講演会(@クラスノヤルスク国立医科大学)にて本学教員が講演を行った。	山本 祐規 インゼバー エヴァーサ ビーナ
(2) 都市づくり	北海道 大学	寒冷地 適応型 省エネ 技術	・北東連邦大学 ・サンクトペテルブルク国立建築土木大 学 ・ウラル連邦大学		Northern Sustainable Development Forum2020 オンライン寒冷地セミナー「北方圏における日露連携」	その他	教員(研究交流)	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 9月30日に開催されたオンライン寒冷地セミナー「北方圏における日露連携」にて「寒冷地の建設技術とデザイン」をテーマとした分科会を設け、北海道大学のほか、ロシアから北東連邦大学、サンクトペテルブルク国立建築土木大、ウラル連邦大学などの教員・学生が約30名参加し、研究発表を行った。	瀬戸口剛, 森太郎

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(2) 都市づくり	北海道大学	寒冷地適応型省エネ技術	ムルマンスク国立工科大学		International Conference ARCTIC CITIES PLANNING AND DESIGN	その他	教員(研究交流)	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) Arctic University of Norway, UiT(ノルウェー)、ムルマンスク国立工科大学(ロシア)、北海道大学(日本)で協働して北極域・寒冷地の都市計画や建築技術について研究交流や学生交流を行うことを目的に2020年度より組織されたARUP (Arctic Urban Planning and Design - Research and Education Network)の活動の一つとして、オンラインでの国際会議を開催。北海道大学は企画運営のほか、プレゼンテーションおよびパネルディスカッションに教員3名が参加した。	瀬戸口剛, 森太郎, 渡部典大
(2) 都市づくり	北海道大学	寒冷地適応型省エネ技術	・太平洋国立大学 (NIOnc2021主催)	・関東学院大学	日露デザインクール	学生の相互派遣	教員 修士 博士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 海外ラーニング・サテライト「日露デザインスクール」のプログラムとして、教員2名と学生2名が太平洋国立大学主催の国際研究交流会「New Ideas of the New Century-2021」に参加。例年ハバロフスクの太平洋国立大学にて開催されていたが、本年は新型コロナウイルス感染拡大のためオンラインで開催された。参加学生は研究発表を行い、教員はレクチャーを行った他、今後の交流活動に関する意見交換を行った。本イベントでは、主催の太平洋国立大学のほか、ロシアからはサントペテルブルク国立建築土木大学、極東国立交通大学、アムール国立大学、ウフア国立石油技術大学、ウラル連邦大学などの学生も参加し、研究発表を行った。	瀬戸口剛, 渡部典大
(3) 中小企業交流	金沢大学		カザン連邦大学		日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム	学生の相互派遣 その他(アントレプレナー教育、インターンシップ)	修士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 日露間で活躍する企業や団体から計8名の講師を招き、オンラインにてアントレプレナー講義を行った。講義に対するオフィスアワーの時間を設けることで講師と学生間で活発な意見交換があり、一部の学生については講師が主催する企業へのオンラインインターンシップへの参加も予定されている。	大友 信秀
(4) SDGs・環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	北極圏・北方圏の地域開発	・北東連邦大学 ・サントペテルブルク国立大学 ・モスクワ国立国際関係大学 ・ハバロフスク国立経済法科大学	・北海道 ・札幌市 ・北海道国際交流・協力総合センター (HIECC) ・公益財団法人 環日本海経済研究所 (ERINA)	北極域研究推進プロジェクト (ArCS II)	その他(産学官連携型のイベントへの教員参加、講演・ワークショップ開催)	学部 修士 その他(教員、官民団体関係者)	② 企業・地方自治体等との連携 2020年9月30日の北海道大学と北東連邦大学/サハ共和国と共催のオンライン寒冷地セミナー (Northern Sustainable Development Forum-2020の行事)に参加(北東連邦大学の学部生約20名が聴講)。2021年1月12日にオンラインセミナー「Multilevel Governance and Interregional Cooperation: Vol.1 - The Pacific Arctic」(英語)を、3月3日に「Japan-Russia Interregional Cooperation in the Arctic and North - Theory and Practice」をHaRP事務局と共催(日英露同時通訳)。後者ではサハ共和国対外関係局長、ハバロフスク地方議会議長が講演。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) HaRP事務局の紹介でサントペテルブルク国立大学国際関係部との交流が始まり、3月4日・11日に同大学の修士課程の(留学生を含む)学生を対象にオンラインにて講演、演習に参加。	サウナワラ ユハ

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の 氏名
(4) SDGs:環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	SDGs達成を目標とした環境観測における無人航空機(UAV)の適用	モスクワ国立大学 ・北東連邦大学			その他	修士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 2020年11月30日～12月3日に地球情報学における機械学習とデータラーニングに関するオンラインシンポジウムをモスクワ国立大学地理学部と共催。(参加者数・・・合計62名で、日本側6名、ロシア側2名と2研究機関、民間企業5社。日本側の学生は22名、ロシア側の学生も数名参加。)	アバタラム
(4) SDGs:環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	資源開発・環境保全	北東連邦大学			その他		② 企業・地方自治体等との連携 北海道と連携してセミナーを開催した。	田畑伸一郎
(4) SDGs:環境・資源開発・多文化教育	金沢大学	環境教育や日露SDGs教育	モスクワ国立大学 サンクトペテルブルク国立大学 カザン連邦大学 極東連邦大学 国立アルタイ大学 国立イルクーツク大学			学生の相互派遣	学部 修士 博士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」及びSDGs4「質の高い教育をみんなに」の達成に貢献すべく、本学の日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム「文化交流プログラム」にて学生交流および講義を行った。これらは全てオンラインで実施した。また、白峰地区の地域住民と学生の交流の場を設け、地域活性化と地域コミュニティ能力の向上を図った。	ママードウ アイデア
(4) SDGs:環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	・持続可能な開発のための教育(ESD) ・ESDグローバルパートナーシップ協同教育プログラム	・サハリン国立大学 ・ウラル国立教育大学		・双方向型短期留学支援プログラム「ESD Campus Asia Pacific」 ・ESDグローバルパートナーシップ協同教育プログラム	学生の相互派遣	学部 (2、3、4年生、2年生が主体)	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 ・教育学部では6大学5か国間の双方向型短期留学支援プログラム「ESD Campus Asia Pacific」において、交流協定校のひとつであるサハリン国立大学教育学部との交流を2017年度より開始している。 ・同時に「ESDグローバルパートナーシップ協同教育プログラム」として、同2017年より同大学と3か月間の単位互換・双方向型・短期留学プログラムも開始した(学士課程の学生を2～4名派遣)。交流プログラムは、国連が掲げるSDGsを達成するための学びを異文化理解・多言語教育の観点から深め、他国での実践的経験を通じて、将来に渡る幅広い社会的教育指導者の育成を目的とする包括的な教育を目指すものである。 ・本年度は2020年度9月14-16日の3日間および2021年2月17日(終日)にサハリン国立大学の教員および学生の参加を得て、オンラインによる国際協同教育プログラム実施した。3か月の双方向型派遣プログラムについては世界的なパンデミックの状況により、事実上実施できなかった。 なお、2020年度はウラル国立教育大学と北海道大学大学院教育学院・教育学部との間で部局間協定を締結する準備を進めた。手続きの関係上、2021年度初旬に締結完了を見通している。	池田 恵子

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(4) SDGs: 環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	東アジア・極東ロシア地域における移住プロセス ・異文化コミュニケーション	・サハリン国立大学 ・ノヴォシビルスク国立工科大学	日本ロシア語教育研究会 日本ロシア語学校教師会	タンデム・ランゲージ・ラーニング・プロジェクト(Tandem Language Learning Project: TLLP)	その他(国際シンポジウムの開催、共同プロジェクトの実施、共同出版プロジェクトなど)	修士 博士	② 企業・地方自治体等との連携 本年度はコロナ禍により、積極的な呼びかけを実施することは困難であった。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) ・2020年9月に教員2名と大学院生が北東連邦大学で継続されているCold Lands Seminarの一環として企画されたハネルに参加し、アイヌ民族の社会的課題や上記教育学部のESDキャンパス・アジア・パシフィックの動向について報告を行った。 ・2021年2月18日にSDGs: Environment, Resource Development, Multicultural Educationのセッション活動の一環として、2019年度のテーマを継承し、先住民問題をテーマとして北東連邦大学との間でseminarを共催し、大学院生および教員が参加した。 ・2021年2月25日に同SDGsセッション活動を継続し、サハリン国立大学・ウラル国立教育大学と北海道大学との間で、「ポストコロナ社会の身体-相互依存社会の新时代」と題する3大学合同セミナーを開催し、北海道大学の学部生、大学院生、教員、サハリン国立大学、ウラル国立教育大学の学生、教員を含む36名の参加があった。 以上、2019年度以来、北東連邦大学、サハリン国立教育大学、ウラル国立教育大学との間の学生交流・地域支援教育の遂行は定着しつつある。	バイチャゼ スヴェトラナ
(4) SDGs: 環境・資源開発・多文化教育	北海道大学	先住民に関する研究	北東連邦大学	北海道平取町		学生の派遣 その他(テレビ会議による教員と大学院生の合同研究会)	修士 博士	② 企業・地方自治体等との連携 平取町に所在する資料館と連携した。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 2020年度の学生参加者数等7名: 国際会議Northern Sustainable Development Forumへの参加及び発表DC3名MC1名、内DC2名は文学院所属 国際セミナー・研究会Online International Seminar of Japan-Russian collaboration on Articulations of Indigenous	ジェフリー ジョセフ ゲーマン

セッション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(5) 産業多様化促進	札幌大谷大学	文化	・サントクトペテルブルク国立大学 ・モスクワ国立大学	小樽商科大学		その他(教員の派遣)	学部 その他(教員)	<p>Culture between HU SoE and the NEFUへの参加4名(内MCI1名と研究生1名は発表) (上記の内MCI1名は会議、セミナー合わせて2回の参加及び発表)</p> <p>・2020年9月末にヤクーツク市で開催された産学官連携型の北方圏持続可能な開発フォーラム(Northern Sustainable Development Forum)に教員1名と大学院生4名(修士1名、博士3名、博士の内2名は大学院所属)に参加し、発表をした。 北東連邦大学等と共同で行った寒冷地セミナー(Cold Lands Seminar)のセッション5(9月29日)―先住民族とメディア―開発のための戦略―(Session 5. Indigenous Media: Development Strategies)およびセッション2(9月30日)―北方の地域―環境、資源開発、コミュニティ―(Section 2 "The Northern community" ("Environment, Resource Development and Community"))に参加し、発表した。 ・北東連邦大学のSidorova准教授との共同企画として、2021年2月18日にテレビ会議による北東連邦大学の教員及び学生等との合同研究会Online International Seminar of Japan-Russian collaboration on Articulations of Indigenous Culture between HU SoE and the NEFUを開催。</p>	山田 政樹
								<p>① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 サントクトペテルブルク国立文化大学</p> <p>③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) Zoomを使用し、学生間交流を3回行った。</p> <p>1. 第1回オンライン学生間交流会 in Zoom (2020年8月27日) 言語は全て日本語で行った。 ・北海道と札幌について(日本学生プレゼン) ・サントクトペテルブルクについて(ロシア学生プレゼン) ・ブレイクアウトセッションでのデイスカッション</p> <p>2. 第2回オンライン学生間交流会 in Zoom (2020年10月3日) 言語は全て日本語で行った。 ・札幌大谷大学の由来と日本の宗教について(日本学生プレゼン) ・ロシア学生の迷信について(ロシア学生プレゼン) ・ブレイクアウトセッションでのデイスカッション</p> <p>3. 第3回オンライン学生間交流会 in Zoom (2020年11月21日) 全て言語は英語で行った。 ・札幌大谷大学の紹介(日本学生プレゼン) ・サントクトペテルブルク国立文化大学の紹介(ロシア学生プレゼン) ・ブレイクアウトセッションでのデイスカッション</p>	

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(6) 極東産業振興	金沢大学	・海洋科学 ・環境科学 ・生態学 ・毒理学 ・魚病学 ・大気科学	・極東連邦大学 ロシア科学アカデミー極東支部 ・ロシア科学アカデミー極東支部太平洋海洋研究所		日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム	学生の相互派遣 研究者の受け入れ シンポジウムの開催	修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 世界展開力:日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム 1) 金沢大学ロシア同窓会設立記念世界展開力(ロシア)事業ジョイントシンポジウム開催(9月29日)分科会(環境学)で学生6名(ロシア側3名、日本側3名)の発表 2) 極東連邦大学の研究室とのオンラインセミナーの開催(7月9日、10月26日) ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) ・共同利用・共同研究拠点 1) 研究集会 2021/3/10 オンライン形式 ロシア科学アカデミー極東支部太平洋海洋研究所 2) 重点共同研究 ロシア科学アカデミー極東支部太平洋海洋研究所 海底湧水に関する研究。 2020年度はコロナ禍のため日本とロシア沿岸での観測をそれぞれの機関で実施、e-mailとオンラインでうち合わせ。若手研究者・大学院生・学部生の参加を通しての学生交流・人材育成に寄与。 ・ロシア極東連邦大学主催の国際シンポジウム「International Scientific Conference FarEastCon-2020(10月6-9日)」に環日本海域環境研究センター教員2名がオンラインでの発表に招へい。学生も参加。	長尾 誠也
(6) 極東産業振興	千葉大学	・スマート農業 ・温室ビジネス (植物工場、食ビジネス) ・農業工学 ・園芸学	・沿海地方国立農業アカデミー ・極東国立農業大学 ・サハリン国立大学 ・ウスリースク国立農業大学 ・ノヴォシビルスク国立農業大学 ・ロシア側民間企業(温室・養蜂等)	・農林水産省 ・柏市 ・イワタニアグリグリーン株式会社 ・株式会社 プラネット ・双日株式会社、双日食料株式会社 ・ハンモ株式会社 ・NPO 植物工場研究会	極東ロシアの未だ農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム(FARM)	学生の相互派遣 インタビュー シニア	学部 修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 10月以降、オンラインでの学生交流プログラムを実施(サハリン国立大学、沿海地方農業アカデミー) 11月以降、ロシアからの学生受入れ、対面プログラム(講義、実習、インターシニア)を実施(サハリン国立大学、沿海地方農業アカデミー、極東国立農業大学、ノヴォシビルスク国立農業大学) ② 企業・地方自治体等との連携 インタビューを実施中(計画)(イワタニアグリグリーン、ハンモ、NPO植物工場研究会、プラネット等) ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 11月以降、ロシアからの学生を6名受入れ、対面プログラム(講義、実習、インターシニア)を実施している(サハリン国立大学、沿海地方農業アカデミー、極東国立農業大学、ノヴォシビルスク国立農業大学) 今年度中にノヴォシビルスク国立農業大学と協力して、ロシア語版の教科書を出版予定	高垣 美智子

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の 氏名
(6) 極東産業 振興	東京農業 大学	・食品開 発 ・食文化 ・農業振 興 ・海洋科 学 ・露青年 交流	・極東連邦大学 ・LLC Euro-Asian Trading House Innovation (OOO «Евро-Азиатс кий Торговы	・自治体:高知県、茨城 県、北海道網走市、岩手 県久慈市など42件 ・教育機関:北見工業大 学など8件 ・企業:ロイヤルホール ディングス、野村証券、日 本香堂など26件 ・日立トリプルウィン 株 式会社 ・株式会社 ホーブ ・サクラ化学工業 株式 会社		学生の受入 その他(イ チゴ栽培に 関する極東 連邦大学と の共同研 究)	学部 修士 博士(予定)	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 極東連邦大学の学生と東京農業大学の学生とのオンラインでの交流	丹羽 光一
(7) 先端技術 協力	北海道 大学	生物計 測化学	・モスクワ国立大学 ・メンデレーエフ記念 化学工科大学	・東北大学 ・Tiamma Japan株式会 社		学生の受入	修士 博士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) モスクワ国立大学およびメンデレーエフ記念化学工科大学の学生の研 究報告と北海道大学の学生の研究報告を相互に行った。	渡慶次 学
(7) 先端技術 協力	東海大学	レーザ ー技 術	・モスクワ国立大学 ・極東連邦大学 ・トムスク国立大学 ・ロシア科学アカデ ミー極東支部沿海 地方科学研究セン ター	東海大学		学生の相互 派遣	学部 修士 博士	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) フルガリアより研究者1名を招へい、 大学院総合理工学研究科の公聴会開催(極東連邦大学) The 1st FEFU-Tokai Joint Workshop on Robotics Mechatronics and Control 開催 応用流体力学に関するラウンドテーブル開催(モスクワ国立大学) 共同研究発表(トムスク国立大学, MISIS, 極東連邦大学)10報	山口 滋
(7) 先端技術 協力	近畿大学	・再生可 能エネ ルギー ・製品開 発、プロ ジェクト を推進・ 牽引する グローバル 人材 の養成	・モスクワ国立大学 ・ドゥブナ国立大学 ・ITMO大学 ・チュメニ国立大学 ・極東連邦大学 ・サンクトペテルブル ク国立大学 ・ロシア政府附属財 政大学 ・モスクワ国立工業 物理研究大学 (MEPhI) ・モスクワ市立教育 大学	・豊田通商株式会社 ・豊田通商ロシア(Toyota Tusho RUS LLC、モス クワ) ・大阪府 ・ものづくりビジネスセン ター大阪 ・「モノづくり」企業10社	日露間で活躍で きるモノづくり中 核人材の育成	学生の相互 派遣 インター ンシッ プ	学部 修士 博士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 新型コロナウイルスの影響により、渡航を伴う交流は受入2名。オンライ ンプログラムでは、受入59名、派遣30名。 ② 企業・地方自治体等との連携 企業での受入学生インターンシップを実施した。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) オンラインプログラム「近大・ロシアものづくり学生フォーラム」を実施し た。	田中 仙君

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の 氏名
(7) 先端技術 協力	金沢大学	・電子情報 ・機械工学 ・数学 ・物理学 ・物質科学 ・ナノ生命科学 ・製薬	・カザン連邦大学 ・極東連邦大学 ・ロシア科学アカデミー極東支部 ・アルタイ国立大学 ・ロシア製薬企業(Visterra社)	・株式会社 PFU ・株式会社 アクトリ ・津田駒工業株式会社	日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム(基礎科学プログラム、先端科学プログラム)	学生の相互派遣 インターンシップ	修士	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 本学の日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム「基礎科学プログラム」「先端科学技術プログラム」において予定していた学生交流、講義およびインターンシップを全てオンラインで行った。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 日露間で活躍する企業や団体から計8名の講師を招き、オンラインにてアントレプレナー講義を行った。講義に対するオフィスアワーの時間を設けることで講師と学生間で活発な意見交換があり、一部の学生については講師が主催する企業へのオンラインインターンシップへの参加も予定されている。	田中 茂雄
(7) 先端技術 協力	大阪大学	・核エネルギー ・原子力 ・素粒子 ・原子核物理学 ・数値シミュレーション ・計算科学	・極東連邦大学 ・合同原子核研究所	・高知大学 ・名古屋大学 ・九州大学		学生の相互派遣	修士 博士 その他(若手研究者、ポスドク等)	③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) 極東連邦大学所属のポスドク研究員と共同研究を継続。	保坂 淳
(8) 言語・ 文化・観光	東京外国語大学	・人文社会科学分野 ・多様なビジネス分野に関する応用力を備えた、卓越した日露ビジネス人材を育成	(交流協定締結先) ① モスクワ国立大学 ② モスクワ国立国際関係大学 ③ ロシア国立人文大学 ④ 国立研究大学高等経済学院 ⑤ サンクトペテルブルク国立大学 ⑥ 極東連邦大学	(学生交流相手) ・創価大学 ・創価学園(高等学校) (東京外国語大学の受入学生を派遣し、学生同士の交流を進めている) ・橋城市立若葉台小学校(国際理解を深める授業に東京外国語大学の学生を派遣し「ロシアについて」出張授業を行う) (インターンシップ受入先)	日露人的交流の飛躍的拡大に貢献するTUFS日露ビジネス人材育成プログラム	学生の相互派遣 その他(インターンシップ)	学部	① 大学間/部局間協定に基づく学生交流 ・短期受入:2週間のオンライン「日露ビジネスサマースクール」(タンデム学習・国際日本語、字幕翻訳インターンシップ)実施 ・長期受入:日本語及び日本の文化・社会・経済を学ぶ科目履修 ② 企業・地方自治体等との連携(インターンシップ受入先) ・日本映像翻訳アカデミー株式会社(JVTA)受入による事業参加型インターンシップ「J-ANIME MEETING IN RUSSIA」を実施した。 ・RYATICO(ロシアの貿易会社)受入による課題解決型インターンシップを実施した。 ③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) ・JVTAが受入のインターンシップ(2019年11月から約1年間)において	沼野 恭子

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側 相手大学等	日本の他大学・自治体・ 企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の 氏名
		・貿易・ 金融・観 光・交 通・農水 産業・製 造業・ IT・医療 通訳・報 道・文化 交流等 の多様 な分野 で日露 経済活 動を活 性化	・モスクワ市立大学 (協定校ではない) (JVTA主催、東京外 国語大学が共催す る日本アニメ上映イ ベント@モスクワ 2020.05.23-24での 「協力校」) (インターンシップ受 入ロシア企業) ・LLC RYATICO(モ スクワ)	<ul style="list-style-type: none"> 日本映像翻訳アカデミー 株式会社(JVTA) ・ジェトロ ・ソニー株式会社 ・日立建機日本株式会社 ・横河電機株式会社 ・伊藤忠商事株式会社 ・三井物産株式会社 ・住友商事株式会社 ・株式会社 ヤマハ・コミュニ ケーションズ株式会社 ・京セラ株式会社 ・京セラドキュメントソ リューションズ株式会 社 ・飯田グループホールデー ンクス株式会社 ・ジェーアイシー(JIC)旅 行センター株式会社 ・名取事務所 ・国際交流基金 ・SAMI LLC (東京外国 語大学ロシア語科 OB が ペテルブルクで立ち上げ た IT系コンサルティング 会社) 				<p>て、本学の学生22名とロシア協定校(モスクワ国立大学、モスクワ国立 国際関係大学、ロシア国立人文大学、高等経済学院、サンクトペテルブ ルク国立大学)およびモスクワ市立教育大学の学生計36名が交流し た。さらに、2020年8月より日本の大学(神戸市外国語大学、上智大学、 大阪大学、筑波大学、金沢大学、近畿大学の計21名の学生も加わっ た。</p> <p>・春学期の「日露ビジネス講義」、秋学期の「駐在員のロシア語」、サマー スクールでの国際日本語・日露タンデム学習を通じて、語学力強化を含 むビジネス人材の育成が図られた。</p>	
(8) 言語・ 文化・観光	東北大学	日露異 文化交 流	モスクワ国立大学	一般財団法人 東北多文 化アカデミー(予定)	ジョイントリー・ スーパーパーバイズ ド・ダイグリープ プログラム(修士・ 博士) モスクワ国立大 学心理学部学生 短期交流プログ ラム	学生の相互 派遣	学部 修士	<p>③ その他(学生交流・人材育成に関する実績) モスクワ国立大学のアレクサンドル・ラエフスキー准教授をリサーチフェ ローとして受け入れ、共同研究を推進した。</p>	阿部 恒之

セクション名	(8) 言語・文化・観光
日本側大学	神戸市外国語大学
交流分野	<ul style="list-style-type: none"> ・学術面…人文学、特に語学、通訳・翻訳学、外国語教育 ・教育面…共同研究・教材開発、共同論文指導(コチュエナル)・招聘研究者による講義・相互の遠隔講義(通訳・翻訳、語学教育と国際理解教育を目的とする短期相互派遣プログラム、ICTを用いた日露の学生による協働の学び、アクティブラーニング、若手研究者の育成) ・自治体と大学との連携・仲介による相互の学生インター受入れ支援、コミュニケーション通訳養成
ロシア側相手大学等	<ul style="list-style-type: none"> ・モスクワ国立大学 ・国立プーシキン記念ロシア語大学 ・クバン国立大学 ・ウラル連邦大学 ・太平洋国立大学 ・エカテリンブルグ市
日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	<ul style="list-style-type: none"> ・総務省 ・神戸市 ・神戸大学 ・神戸学院大学
プログラム名	
交流形態	学生の相互派遣
対象者	学部 修士 博士 その他(教員)
2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	<ul style="list-style-type: none"> ①大学間協定に基づく学生交流 2020年度… ・モスクワ国立大学(認定)派遣1名(但しオンライン留学) ・クバン国立大学提供によるオンライン講座の受講10名(秋学期・春学期延べ人数) ③その他(企業・地方自治体等との連携) ・「J-ANIME MEETING IN RUSSIA」(「日本映像翻訳アカデミー(JVTA)」主催・東京外国語大学共催;2020年11月14-15日開催)の協力校として事業参加型インターンシップ受講生募集。本学よりインターン8名が参加。
参加者の氏名	金子 百合子

セクション名	日本側大学	交流分野	ロシア側相手大学等	日本の他大学・自治体・企業等との連携(地域連携)	プログラム名	交流形態	対象者	2020年度の活動内容(学生交流・人材育成に係る活動)	参加者の氏名
(8) 言語・文化・観光	上智大学	<ul style="list-style-type: none"> ロシア語 ロシア文化社会 グローバル社会 	<ul style="list-style-type: none"> モスクワ国立大学 モスクワ国立言語大学 サントペテルブルク国立大学 サントペテルブルク国立文化大学 ゲルツェン記念ロシア国立教育大学 リヤザン国立大学 ヴォロネジ国立大学 ペトロザヴォーツク国立大学 極東連邦大学 			学生の相互派遣	学部 修士 博士	<p>① 大学間/部局間協定に基づく学生交流派遣 11名(当初計画 春出発10→途中帰国、秋出発1→留学中止) 受入 2名(オンライン履修)、うち1人はJanuary Session)</p> <p>現在9大学と交換留学協定を締結しており、ロシア語、ロシア文化社会、グローバル社会の分野において、単位互換に基づく学生交換を実施している。2020年度においても継続的に各大学と双方の学生交換を行い、春学期(2020年2-3月出発)より、6大学に10名の学生を派遣した。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響で3月には全交換留学の派遣の中止を決定したため、ロシアへ派遣した学生も全員、出発直後(3月中)の帰国を余儀なくされた。20年秋学期についても、1大学に1名派遣予定だったが、留学中止となった。なお、留学中止となった学生の大半はオンライン受講の機会があっても留学を見送ったが、21年度の交換留学に再応募した学生等、引き続き留学を希望し可能性を探っていた者もいる。また、若干名ではあったが、帰国後も担当教員の厚意により、春学期中オンラインで一部の現地授業に参加させていただいたケースもあった。</p> <p>一方、交換留学生の受入については、2020年度は春学期・秋学期ともに渡日を伴う受入は中止したが、春学期は2019年度継続者のみオンラインで授業を履修した。秋学期は新規でオンライン留学を受け入れ、サントペテルブルク国立文化大学から1名受け入れた。また、本学が毎年1月に実施している短期受入プログラムJanuary Sessionも今年はおオンラインで行い、ロシアから1名の学生を受け入れた。</p>	杉村 美紀

5

日露学生連盟

日露学生連盟は、日露大学協会の下部組織として位置づけられる、「学生の立場と目線」から日露交流を促進する、学生が主体となって運営される組織です。



日露学生連盟のロゴ

主な活動内容

- ・学生代表による学生フォーラムの開催（原則として、日露大学協会総会時に開催され、日露交流の課題と将来像を提言します。）
- ・Facebook, Twitter, InstagramなどSNSを活用した情報共有・情報提供（留学先の生活情報の提供、質問への回答等）
- ・日露両国の学生のための交流イベントの企画及び実行

構 成

会員は、日露の学生交流に意欲のある者で、以下の3つに分けられます。

なお、日本人学生メンバーは49名、ロシア人学生メンバーは90名となっています。（2021年3月現在）

- ・正会員：日露大学協会加盟校の学生
- ・準会員：日露大学協会加盟校以外の日本またはロシアの大学生
- ・賛助会員：日本またはロシアの大学の卒業生

学生連盟SNS

学生連盟は、日々の活動等について、下記のSNSから情報を発信しています。

- ・Facebook <https://www.facebook.com/jrsu2020/>
- ・Twitter <https://twitter.com/russiaaccount>
- ・Instagram <https://www.instagram.com/jrsuofficial/>

日露学生連盟日本側組織

日露学生連盟の日本側組織は、北海道、東北、関東、関西、中国・九州の5つの地域ごとにエリアに分けられており、全会員はいずれかのエリアに所属しています。また、各エリアにはエリア長と副エリア長、広報担当が置かれており、各エリアに分かれて日露学生交流の発展となる活動を行っています。

なお、ロシア側組織は、ロシア側のルールに則って、活動を行っています。ロシア側組織表は次のページのとおりです。

エリア

北海道

- ・ 北海道大学

東 北

- ・ 東北大学
- ・ 福島県立医科大学

関 東

- ・ 新潟大学
- ・ 創価大学
- ・ 東海大学
- ・ 上智大学
- ・ 東京外国語大学
- ・ 新潟県立大学
- ・ 早稲田大学
- ・ 慶應義塾大学
- ・ 筑波大学
- ・ 法政大学

関 西

- ・ 神戸学院大学
- ・ 神戸市外国語大学
- ・ 金沢大学
- ・ 神戸大学

中国・九州

- ・ 広島大学

JRSU Organization Chart in Russia

The Co-Chair from Russian side

General Managers in Federal Districts

Central	Privolzhsky	Far Eastern	Southern
Siberian	North western	Ural	North Caucasian

Coordinators in the Universities in the cities

Moscow	Nalchik	Kazan	Irkutsk
Moscow region	Rostov-on-Don	Nizhny Novgorod	Vladivostok
Belgorod	Voronezh	Chelyabinsk	Khabarovsk
Ryazan	Saint Petersburg	Barnaul	Yuzhno-Sakhalinsk
Krasnodar	Arkhangelsk	Novosibirsk	Yakutsk
Saratov	Krasnoyarsk	Izhevsk	

日露学生連盟の今年度の活動

今年度の主な活動の1つとして、同連盟の運営組織や、活動形態などを取り決めた規約の策定の作業を行ったことが挙げられます。現在、日露メンバー間で精査を重ねており、来年度早々には完成する予定です。

また、今年度は、新型コロナウイルスの影響で、日露間の往来ができない状況だったため、オンラインを利用した日露間での勉強会を、2020年10月から、ひと月に一回のペースで日露合同勉強会を実施しました。

勉強会は、毎回決められたテーマがあり、そのテーマに関連した質問を、日露それぞれの学生が事前に考え、相手国からの質問に対する回答をまとめて、英語で発表するものです。

また、テーマが決まった段階で発表(プレゼンテーション)が行われ、その後、参加学生によってディスカッションや、情報共有などが行われます。これまでのテーマは、「環境」「ビジネス」「コロナに対する各国の取組」「医学」など広い分野にわたっており、日露国家間の知識のみならず、学生自身の専攻に関する知識も必要となり、お互いの国の学生が、刺激を受けつつ、交流することができました。





勉強会の様子

また、今年度は、日露学生連盟の規約案の作成や、オンラインでの開催にはなりましたが、第3回日露産官学実務者会議での活動報告などを行いました。(同会議での資料は次のページのとおり)



Japan-Russia Student Union



Development and perspectives of Japan-Russia Student Union for the Japan-Russia academic collaboration

Ekaterina ZIMAKOVA, Moscow State University
Takumi WATANABE, Niigata University

27th January 2021 | Online conference



Japan-Russia Student Union



For youth Japanese and Russian friends education, science, professional growth, social adaptation, cultural and personal development



- ✓ students , 54 universities;
- ✓ geographic and interregional character;
- ✓ interaction with the authorities of both countries and international organizations;
- ✓ intercultural exchange, meetings and events with foreign students;
- ✓ language practice;
- ✓ help in social adaptation;
- ✓ scientific research;
- ✓ technical help and economic development;
- ✓ sports activities.



Covenant of JRSU



Start of our work - 2020 year.
Preparation of the 1st edition: December, 2020.

Main provisions of JRSU

7 Chapters

18 Articles

Japan-Russia Student Union Regulations (Draft)

Table of Contents

- Chapter 1: General Provisions (Articles 1 to 5)
- Chapter 2: Membership (Articles 6 and 7)
- Chapter 3: Governing Body (Articles 8 to 12)
- Chapter 4: Form of Activities (Article 13)
- Chapter 5: Japan-Russia Student Forum (Articles 14 to 16)
- Chapter 6: Amendment (Article 17)
- Chapter 7: Miscellaneous Provisions (Article 18)
- Supplementary Provisions

Chapter 1: General Provisions

Article 1 (Organization and Name)

The Japan-Russia Student Union (hereinafter, "the Union") is a self-governing student body made up of students of member universities of the Association of Japanese and Russian Universities and related parties.

Article 2 (Purpose)

The Union will engage in activities for the following purposes:

- (1) To deepen exchange between Japanese and Russian students;
- (2) To increase the number of students interested in Japanese and Russian culture, science and technology, and research; and
- (3) To serve as a platform for Japanese and Russian students to submit proposals to universities and government agencies, etc.

Article 3 (Location)

The location of the Union in Japan shall be Hokkaido University (Nishi 5-chome, Kita 8-jo, Kita-ku, Sapporo City), and the location in Russia shall be Lomonosov Moscow State University (Российская Федерация, Москва, Ленинский просп. д. 1, Московский государственный университет имени М.В.Ломоносова).



Covenant of JRSU



Problems

To indicate main values and principles of our cooperation.

Membership:

- To include students not only from the universities of the Association, but any students of our countries.
- To include postgraduate students, residents, young specialists under the age of 30.
- To create different types of membership: representatives, ordinary students, mentors, volunteers.
- To indicate the general procedure for admission, registration, withdrawal or exclusion from members of JRSU.

Governing Body:

- To increase the number of vice presidents.
- To make election for 2 years.
- To define decision-making system.

The implementation of organizational and technical support for the work of the governing bodies of the JRSU (secretariat / headquarters).

The consideration of the issue of funding the organization, budget and provision of resources.



Covenant of JRSU Proposals



- To create interdisciplinary team of 5 to 10 students** studying the different specialties:
- a lawyer (specialist in international law and Legal status of Non-Governmental Organizations),
 - an economist,
 - specialist in Japanese language and culture,
 - a sociologist,
 - a computer scientist and etc.

To prepare during next 3-4 months detailed drafts of the Charter and other additional basic documents about various procedures.



The questionnaire about education



3 main sections: General questions, About education, International education

Russian students

- Lomonosov Moscow State University
- Pacific State Medical University
- Novosibirsk State University
- Kazan Federal University
- Southern Federal University

34

Survey questionnaire Japan-Russia Student Union

The survey is conducted for the preparation of a report at the Third Japan-Russia Industry, Academia and Government Working Level Conference (IAG Conference).
About the relevance and perspectives for the development of higher education in Japan and Russia.

General number of students: 65

- 1st Section:**
- Status
 - Specialty

Japanese students

- Niigata University
- Hokkaido university
- Hiroshima University
- Kanazawa University
- Kindai University
- Osaka University
- Soka University
- Tokai university
- Kobe city university of foreign studies

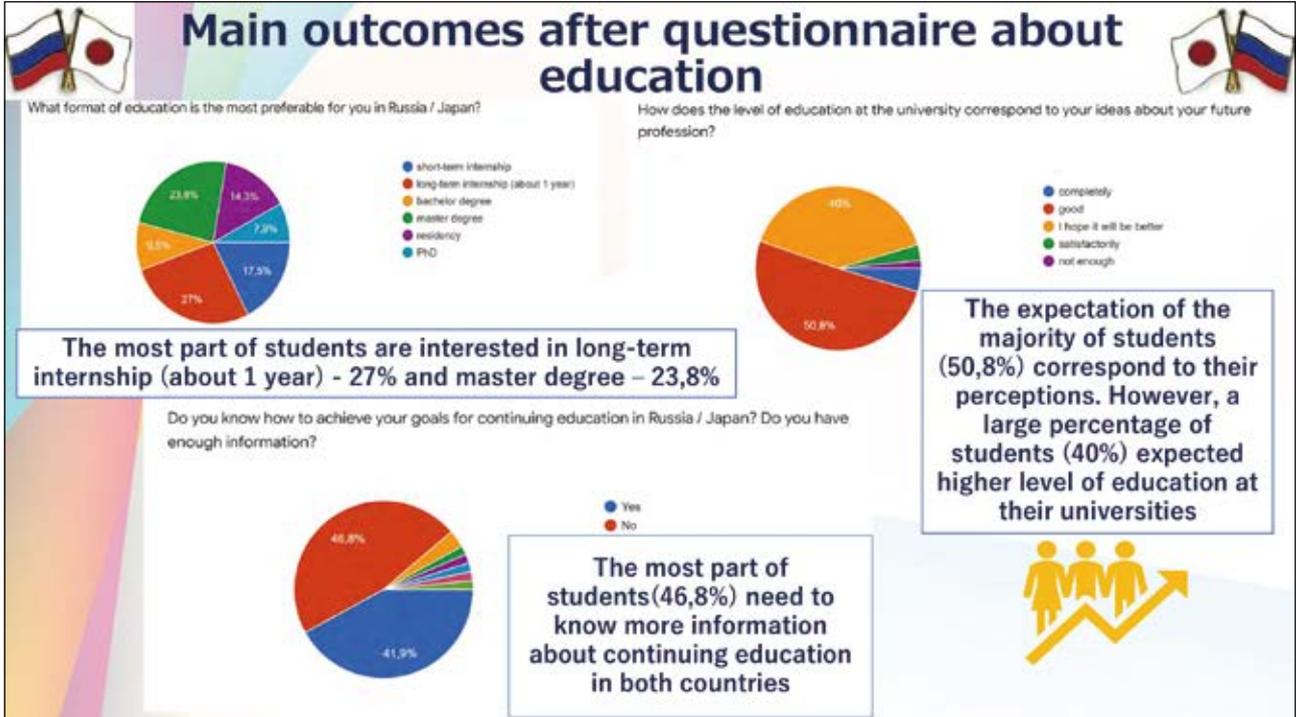
31

2nd Section:

- Advantages and disadvantages of studying in both countries.
- Where would you like to continue your education?

3rd Section:

- Do you know how to achieve your goals for continuing education in Russia/Japan?
- What difficulties or problems do you see with obtaining information about education in Russia and Japan?



Zoom-meetings of JRSU

Self-isolation can bring us closer together

COVID-19

Ecology

Business

MONTHLY MEETINGS

Until the last forum ...

No study meeting

Last Forum in 2019

It was difficult to have deep discussion in the forum

For the next forum

No study meeting

Last Forum in 2019

Study meeting

Student Forum in 2021

Since we are gaining knowledge about Russia and Japan beforehand, we will have deeper discussion this year!

Japan-Russia Student Union

真の強さを学ぶ。



新潟大学

NIIGATA UNIVERSITY



See you again in Niigata!

2021 | Niigata, Japan

2021年1月27日(水)午後、「第3回日露産官学連携実務者会議」及び「令和2年度大学の世界展開力強化事業採択校(ロシア)活動状況報告会」をオンライン開催しました。昨年度実施された第2回の会議では、日露交流を行う大学(日本の大学19校,ロシアの大学30校)に加え、29の機関・団体から約160名が一堂に集い、日露交流の発展及び促進を目的として情報共有や意見交換を行いました。第3回の今回は、新型コロナウイルス感染症流行拡大の影響によりオンラインでの開催となりましたが、日露交流を行う大学(日本の大学23校,ロシアの大学47校)を含め、文部科学省,経済産業省,関係企業・団体等,日本側31機関,ロシア側57機関から,昨年度を上回る約185名が参加しました。なお,本会議は,日露大学協会,日露地域・姉妹都市交流年事業行事として認定を受け実施されました。

「第3回日露産官学連携実務者会議」に先立ち,13時から「大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校活動状況報告会」が開催され,平成29年度に採択された7事業8大学(千葉大学,東京外国語大学,東京工業大学,金沢大学,長崎大学・福島県立医科大学,東海大学,近畿大学)が,コロナ禍におけるロシアとの教育交流の取組やその課題についての報告を行いました。対面と同様の教育効果をもたらすよう工夫を凝らしたオンラインによるロシアとの教育交流の取組が各大学より紹介されるとともに,文部科学省担当者と採択校間の意見交換も行われ,世界展開力強化事業関係者間で有益な情報共有を行うことができました。

15時に開始した「第3回日露産官学連携実務者会議」は,冒頭の北海道大学の横田 篤 理事・副学長及び佐藤 邦明 文部科学省 高等教育局 主任大学改革官・国際企画室長の挨拶から始まり,二部構成で行われました。



北海道大学 横田理事の開会挨拶



文部科学省 佐藤 邦明 主任大学改革官による挨拶

「日露産官学連携によるキャリア支援」をテーマとして実施された第一部は、北海道大学より2020年度の専門セッション活動報告や第一部の論点(産官学コンソーシアムの取組と大学の実務者教育との相互連携)の説明が行われた後、産官学それぞれの立場から、キャリア支援の取組について発表がありました。まず、独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)から、ロシア高度人材に関する調査結果に基づく日露高度人材交流の現状や今後の課題についての発表がありました。続いて、ロシア側より、高等経済学院から、ユニクロロシアとの共同インターシッププログラムについて、サハリン国立大学及び在ユジノサハリンスク日本国総領事館から、廃棄物処理・エネルギー等の分野の日本の知見をロシアの若手研究者に伝授するための産官学連携共同セミナーについての説明が行われました。日本側からは、近畿大学・東京外国語大学による日露人材育成プログラム参加者へのキャリア支援の取組、具体的には企業インターンシッププログラムやOB・OGによるビジネス講義などの実施による実務者育成についての説明がありました。さらに、経済産業省の8項目の協力プランに基づく日露人材育成や地域間交流の取組の説明に続き、北海道より、医療・行政分野・ロシア語教育等における北海道とロシアとの地域間交流やロシア人材活用に係る取組の紹介が行われました。その後の意見交換のセッションでは、各発表者により、インターンシッププログラム実施にあたっての工夫や、実務者育成に向けた大学教育の役割などが掘り下げて議論されました。最後に、司会進行を務めた北海道大学の瀬戸口 剛 工学研究院長が、今後もHaRP事業を通じて企業・大学間の個別のネットワークやその知見を広く共有し、企業・大学双方にメリットがある連携を進めることの必要性を述べ第一部を総括しました。



第一部司会進行の北海道大学 瀬戸口教授

17時に開始した第二部は、「今後の日露教育交流の発展に向けて」をテーマとして、ロシア連邦高等教育科学省Igor GANSHIN国際連携部部長の来賓挨拶(代読)に続き、日露大学協会の下に置かれている日露学生連盟・人材交流委員会の活動報告が行われました。人材交流委員会の報告では、日露大学間の大学教育制度の相違や単位互換・認定の現状にかかる説明が行われ、特に、ロシアの大学におけるコンピテンス(学生が獲得すべき能力)を基準としたカリキュラム編成やネットワーク形式(Network form)と呼ばれる他機関との教育連携の枠組みについて、日本の大学に向け紹介が行われました。各機関による発表のセッションでは、ロシア側大学を代表し、モスクワ国立大学が、コロナ禍における学生のモビリティの向上に向けた取組、特に、オンラインによる授業や共同研究の実施、日本の大学で取得した単位の認定方法について発表しました。日本側大学からは、新潟大学の医学分野でのダブルディグリープログラムにおける単位互換、北海道大学のロシアの大学とのネットワーク形式を利用したジョイントマスタープログラムなどの特色ある取組が紹介されました。加えて、HaRP事業実施大学である北海道大学より、HaRP事業の補助金期間が終了する令和3(2021)年度末以降の事業実施計画の構想が参加者に共有されました。意見交換のセッションでは、日露双方の機関から、単位互換やコチュテルプログラムといった教育連携の事例が紹介されるとともに、日本側でコンピテンス概念を導入することにより教育の質を担保する形で教育連携が発展することへの期待が述べられました。最後に、人材交流委員会委員長である北海道大学の加藤 博文 教授が、コンピテンスやネットワーク形式の概念に基づき、日露大学間の教育プログラムの共有化の取組を進めるべく、継続した議論を行うことに言及し、閉会となりました。

本会議では、第一部・第二部を通して、様々な観点から人材育成に関する情報共有や意見交換が行われるとともに、HaRP事業における日露交流の取組を多角的に多くの方に知っていただくことができました。この会議を契機として、今後も、日露交流に携わる実務者同士のネットワークをさらに強化するとともに、産官学連携による人材育成や日露大学間の教育連携を発展させるべく、様々な取組を実施する予定です。



第二部モスクワ国立大学BUKHSHTABER副学長の発表



日露地域・姉妹都市交流年事業行事ロゴマーク

概要

開催日 2021年1月27日(水)

時間	プログラム
15:00-15:10	開会挨拶 - 横田 篤 北海道大学 理事・副学長 - 佐藤 邦明 文部科学省 高等教育局 主任大学改革官・国際企画室長
第一部：テーマ「日露産官学連携によるキャリア支援」(15:10-16:40)	
	今年度の専門セッション動向や、「キャリア支援・人材育成」の観点における産官学連携の好事例紹介・分析
15:10-15:15	・2020年度の専門セッション活動報告 ロマーエヴァ マリーナ 北海道大学 国際部国際連携課 産学官連携コーディネーター
15:15-15:20	・日露産官学連携の動向及び連携型のキャリア支援の取り組み 瀬戸口 剛 北海道大学 工学研究院 研究院長・教授
15:20-15:25	・日露高度人材交流の現状や今後の課題について—ジェトロのロシア高度人材に関する調査結果を基に— 下社 学 独立行政法人 日本貿易振興機構(JETRO) 企画部 主幹
15:25-15:35	・日露人材育成に携わる大学・企業・自治体にとっての利点 - Uliana STRIZHAK 高等経済学院 国際経済政治学部 東洋講座主任教授 Denis PEREDERIN 高等経済学院 国際経済政治学部 東洋講座 客員講師 安達 史紀 LLC UNIQLO (RUS) CEO - Viktor KORSUNOV サハリン国立大学 国際部 部長 久野 和博 在ユジノサハリンスク日本国総領事
15:35-15:45	・日露人材育成プログラム参加者へのキャリア支援 - 松下 聖 近畿大学 グローバルエデュケーションセンター 特任講師 - 新井 滋 東京外国語大学 世界言語社会教育センター 特任教授
15:45-15:50	・8項目の協力プラン及び日露人材育成に関する取組 鶴田 将範 経済産業省 通商政策局 欧州課 課長
15:50-15:55	・北海道とロシアとの地域間交流と日露人材の育成に関する取組 佐藤 知至 北海道 国際課 ロシア担当課長
15:55-16:25	意見交換・質疑応答
16:25-16:40	総括・閉会 瀬戸口 剛 北海道大学 工学研究院 研究院長・教授

休憩 (16:40-17:00)

第二部：テーマ「今後の日露教育交流の発展に向けて」(17:00-18:30)

	世界展開力強化事業最終年度に向けて、日露大学間の単位互換の推進に向けた取組や、事業終了後の日露教育交流推進体制についての好事例紹介・意見交換
17:00-17:05	来賓挨拶 Igor GANSHIN ロシア連邦高等教育科学省国際連携部部長
17:05-17:10	日露学生連盟活動報告
17:10-17:25	人材交流委員会活動報告/日露教育・学生交流の動向報告(コンピテンスベースのアプローチ・ネットワークフォームによる教育連携の紹介等) 加藤 博文 北海道大学 モスクワオフィス 所長 (人材交流委員会 委員長)
17:25-17:50	発表
	・日本の大学との学術・教育交流の動向について Natalia BUKHSHTABER モスクワ国立大学 副学長(国際化推進担当)
	・ダブルディグリープログラムにおける単位互換の実践 山川 詩保子 新潟大学 国際連携推進本部 准教授
	・北東連邦大学とのジョイントマスタープログラムについて 杉本 敦子 北海道大学 北極域研究センター 教授 ※人材交流委員会 加藤委員長による代読
17:50-18:00	・世界展開力強化事業終了後の日露教育交流推進体制について 川野辺 創 北海道大学 国際連携機構 副機構長・教授
18:00-18:20	コメント・意見交換・質疑応答 ・コメンテーター - Vladlen KUGUNUROV 北東連邦大学 副学長(国際交流担当) - Evgeniya ZHDANOVA アルタイ国立大学 副学長(学務担当) - Alexander RAEVSKIY モスクワ国立大学 心理学部 准教授 - Igor TITOV 在日ロシア連邦大使館 参事官 - 金子 百合子 神戸市外国語大学 外国語学部 教授 - 加藤 百合 筑波大学 人文社会系 教授 - 瀬戸口 剛 北海道大学 工学研究院 研究院長・教授 - 吉岡 路 文部科学省 高等教育局高等教育企画課 国際企画室 専門官
18:20-18:30	総括・閉会 加藤 博文 北海道大学 モスクワオフィス 所長(人材交流委員会委員長)

開催形式 オンライン形式

参加人数 約185名

参加機関 日露の大学(大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校, 日露大学協会加盟校等), 文部科学省, 外務省, 経済産業省, ロシア大使館, ロシア通商代表部, 日露交流を行う企業, 自治体, 団体等(後述の「参加機関一覧」参照)

参加機関一覧

● 関係省庁 文部科学省, 経済産業省

● 日本の大学, 高等教育機関

〈大学の世界展開力強化事業(ロシアとの交流)〉

平成29年度採択校: 千葉大学, 東京外国語大学, 東京工業大学, 金沢大学, 長崎大学, 福島県立医科大学, 東海大学, 近畿大学

平成26年度採択校: 筑波大学, 東京大学, 新潟大学, 北海道大学

〈日露大学協会加盟校〉

神戸市外国語大学, 上智大学, 創価大学, 東京農業大学, 南山大学

〈専門セクション参画校〉長岡技術科学大学

〈その他〉愛知県立大学, 国際教養大学, 信州大学

● ロシアの大学

〈日露大学協会加盟校〉

モスクワ国立大学, アルタイ国立大学, 極東連邦大学, イルクーツク国立大学, カザン連邦大学, クラスノヤルスク国立医科大学, セチェノフ第一モスクワ国立医科大学, サハリン国立大学, 北東連邦大学, 北方(北極圏)連邦大学, 太平洋国立医科大学, 太平洋国立大学, 南方連邦大学, サラトフ国立大学

〈その他の大学〉

アストラハン国立大学, ヴォルゴグラード国立大学, 極東国立農業大学, 極東国立交通大学, ドン国立工科大学, 高等経済学院, ハバロフスク国立経済法科大学, ニジニーノヴゴロド国立言語大学, モスクワ国立言語大学, モスクワ市立教育大学, ムルマンスク国立工科大学, MISIS国立研究工科大学, 名古屋大学ウズベキスタン事務所, 北東連邦大学, 北西国立医科大学, ノヴォシビルスク国立医科大学, ノヴォシビルスク国立建築土木大学, ロシア大統領府附属ロシア国民経済行政学アカデミー, サンクトペテルブルク国立大学, サンクトペテルブルク国立建築土木大学, サンクトペテルブルク国立文化大学, サンクトペテルブルク国立経済大学, トムスク国立大学, トムスク国立制御システム無線電子工科大学, ウリヤノフスク国立大学, チュメニ国立大学, ウラル連邦大学, チェリャビンスク国立大学, シベリア国立大学, シベリア国立科学技術大学, クズバス国立工科大学

- 日本の企業, 自治体, 団体等

〈企業等〉 NTTロシア, 三井物産株式会社, 双日株式会社, フリーランス通訳・翻訳
〈自治体, 団体等〉 北海道, 独立行政法人 日本貿易振興機構 (JETRO)

- ロシアの企業, 団体等

ヤクート農業研究所, ロシア科学アカデミーシベリア支部北方圏生物問題研究所,
Robowizard/Kawasaki Robotics, LLC UNIQLO(RUS), 在ユジノサハリンスク日本国総領
事館, ロシア連邦交流庁, サンクトペテルブルク市科学高等教育委員会, サハ共和国対外関
係・先住民局, 露日協会チェリャビンスク支部, らくだ日露交流情報文化センター, 文化の都ウ
リヤノフスク基金

日口交流活性化におけるHaRPの役割と 産業界の支援機関による協力の必要性

日本貿易振興機構(ジェトロ)海外調査部欧州ロシアCIS課
課長代理 齋藤 寛

■ 日口交流人材の確保・育成の必要性

日本貿易振興機構(ジェトロ)は1958年設立された経済産業省所管団体で、これまで60年以上にわたり、日本と世界の貿易投資振興に従事してきた。とりわけ2016年以降は日口「8項目の協力プラン」に基づき、「中小企業交流の抜本的拡大」をはじめとするプロジェクトに携わっている。

本プランに基づき、2016年12月以降、日本の中堅・中小企業200社以上に対してロシアビジネス経験豊富な専門家を派遣し、企業に寄り添いながらロシア展開を支援する取り組みを行ってきたが、ロシア進出の成否を分けたのは人材の確保・育成ができていたかどうかであった。ロシアを含む海外展開業務に従事する人材を確保でき、かつ、社内で育成する体制が構築されていた企業はロシア進出が成功する確率が高かった一方、専門人材を確保できなかった企業はプロジェクトが腰折れになるケースが散見された。

また、日本では労働人口減少、特にITエンジニア不足を背景に、外国人高度人材の受入・活用の拡大が喫緊の社会課題となっている。とりわけ深刻なのは中小企業や日本に進出して間もない規模の小さい外資系企業であり、彼らは日本人新卒学生の獲得が容易でないため、外国人高度人材の活用を検討せざるを得ない状況にある。一方、外国人材の雇用に関しては、受け入れに必要な手続き・ノウハウ、採用後の定着支援などにおいて、雇用主が抱える問題・課題は多い(注)。

■ ロシア人高度人材受入拡大に向けた課題

上記を背景に、ロシア人高度人材の活用可能性と留意点を調査した(ジェトロ地域・分析レポート「高度人材の宝庫ロシア:魅力と課題 <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/special/2020/1201/>」を参照)。日本で高度人材に該当する在留資格「技術・人文知識・国際業務」保有者約27万人のうち、ロシア国籍者はわずか1,212名(2019年12月末時点)とどまっている。

そうした中で、①在留ロシア高度人材の活躍のすそ野が広がってきていること(これまでは貿易・マーケティング、通訳・翻訳といった分野での就労がメインであったが、最近では、ホテル、IT、人材など日本国内向け事業での活用が目立っている)、②ITエンジニアの輩出数は世界有数で、強固な理数系教育を基盤としスキル面でも極めて高いレベルにあること、③日本語学習者の数は欧米、アジア諸国に比べ少ない一方、日本語を用いた仕事に就いている人材が少なく、日本企業として獲得できる余地が大きいこと、日本語の学習水準・意欲ともに他国・地域に比べて優れていると評価されていること、④性格面では真面目で勤勉、向学心が強く、親日的で日本社会で受け入れられる親和性があること――などが判明した。これらを踏まえると、ロシアは日本にとって高度人材の供給源として極めて有望な国の1つである

との見方もできる。実際に日本で働くロシア人高度人材は年々増加の一途を辿っている。

他方、ロシア人高度人材活用を推進する上での障害は、両国における双方の国に対する認知不足である。日本ではロシアに関する情報不足とそれによる偏りがみられ、ロシアにおいても魅力的な海外の就労国・地域として日本は認識されていない。このため、今後はより一層、日本におけるロシアのPR、ロシアにおける日本のPRを、特に産業界向けに強化し、これまで関心を持っていなかった層にアプローチしていくことが求められている。

この点で「日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」は大きな役割を果たしうると捉えている。

■ 今後のHaRP事業の成果拡大に向けた提言

HaRPによって近年、日ロ大学間交流、学生交流が目覚ましく活発化しており、両国でロシア人向け、日本人向けのインターンシップの実施が増えている点は、日ロ間の経済・ビジネス交流促進を行っている立場としては心強く感じている。他方で、HaRP事業にはまだ課題があると認識しており、より多くの成果を生み出すために以下のとおり3点提言したい。

1点目はHaRP事業へのビジネス界の参加拡大と、それに向けたプロモーションである。これまでに行われた「日ロ産官学連携実務者会議」に参加したが、大学関係者や官公庁・自治体関係者の参加が大多数である一方、企業関係者による参加がそれほど多くない印象であった。企業にとって魅力的な事業を実施していることもあり、参加企業を拡大していけば波及効果をより大きくできる。一方、大学側としては企業ニーズやメリットが十分に把握できていないこと、企業との付き合い方に慣れていないことが企業との連携という点で障害になっていると聞いている。この点は、ジェットロや各地の商工会議所、企業支援機関などがサポートできるかもしれない。

2点目は大学と企業が人材交流を実施する際に必要なインフラの整備である。外国人インターン生の受入については、大企業であればともかく、中小企業の場合、人手が限られており、手続きや言語の面などで受け入れ側の負担が大きい。このため、それらを軽減する取り組み(ガイドラインや契約書雛型の作成・共有、学生に対するビジネスマナーの指導など)が必要となる。

3点目は出口戦略である。HaRPは2017年度に始まった事業であり、まだ歴史は浅い。今後はその成果、具体的には産業界への人材供給という点が、その当初の目的である「8項目の協力プラン」に資する人材育成という観点でも非常に重要になる。この点ではプロジェクト実施大学による就職支援や参加した学生の追跡、ベストプラクティスのPRと関心喚起などが鍵を握る。

日ロ交流人材の育成という点でHaRPは突破口になる。その活動を日ロ経済・ビジネス関係の拡大とといった具体的な成果につなげていくために、産業界の関係機関も大学と連携・支援していくことが求められていると強く感じている。

(注)ジェットロでは全世界を対象とした「高度人材活用推進事業」を実施している。ロシア人を含む外国人高度人材の日本企業での雇用・活用の際に役立つ知識・ノウハウについて情報発信を行っているほか、外国人材受入に向け企業に個別支援(伴走型支援)を行っている。

当社は、34年前に設立した総合人材会社である。本社は北海道の札幌市にあり、全国各地の拠点で人材紹介、人材派遣、社員研修、外国人の就職支援など、総合人材サービスを展開している。また、当社の連結子会社となる日本語学校を運営しており、14カ国、約100名以上の留学生に日本語を教えている。

当社海外事業部では外国人の就職支援、外国人の受入促進、多文化共生支援を中心に行っている。外国人の就職支援に関しては、北海道大学をはじめとする日本国内や海外の大学向けにキャリア教育や就職指導に取り組んでいる。日本での就職活動セミナーやキャリア形成セミナーを実施しているほか、外国人の採用に向けた合同企業説明会を開催している。

また厚生労働省や北海道、宮城等の官公庁や地方自治体からの委託で、外国人の受け入れ促進に向けた事業を数多く運営している。外国人材の採用に関する企業向けセミナーを開催し、採用方法や就労可能な在留資格、「新型コロナ禍」による採用現場の変化などをテーマとしたセミナーを年間30～50回程度開催している。また企業と外国人との交流会や企業バスツアーも企画・実施している。

当社も外国人社員を8名採用している。国籍は中国、ロシア、ベトナム、インドネシア、ネパールで、各国の教育機関やパートナー企業とのやり取りおよび外国人サポートを母国語で対応している。

当社はこれまで2000名以上の外国人の就職サポートを行ってきたが、日本で就職を希望している外国人が年々増えている。しかし、実際に就職できるのは希望者の中でわずかである。その主な理由が2つ挙げられる。第一に、外国人向けの求人が少ないことに起因する。第二に、多くの外国人が日本の就職活動や在留資格の仕組みが分からないためである。

前者に関しては、当社では外国人材の受け入れを促進するため、日本の企業向けのセミナーを通して外国人材を採用するメリットや注意点について説明し、企業側の疑問点や不安を解消するよう取り組んでいる。

一方で後者に関しては、ロシアをはじめ、国内外の教育機関向けにキャリア育成セミナーやインターンシッププログラム、ビジネス日本語教育等を実施し、外国人の日本企業への就職を支援している。

このように国内留学生を初めとする外国人材が日本で活躍するためには、①外国人材の受け入れに関心を持つ企業のネットワークを構築・強化することや、②国内外の教育機関と連携し、日本での就職を希望する外国人に対して早い段階でキャリア教育を実施することが重要である。

「日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」の活動はロシア人材の育成において必要不可欠な役割を担うと感じており、当社としても協力させていただくことにより、今後より多くのロシアの教育機関に行き届くようなキャリア支援を実施できるように務めていきたいと考えている。具体的な連携方法については、HaRPが窓口となり、教育機関への情報配信を実施し、意見交換の場を設けていただければ、当社は下記の記載のとおり、就職や日本語教育に関する支援、企業とのマッチングを実施することができると考えている。

【当社の教育機関向けプログラムの例】

1、レベルに合わせた日本語教育の実施(初級・中級・上級・ビジネス日本語)

- ・オンライン日本語コース
- ・対面での日本語授業

2、キャリア教育(日本語・英語・ロシア語で実施可能)

- ・就職活動セミナー
- ・ビジネスマナー講座
- ・キャリア育成講座
- ・就職相談会

3、インターンシッププログラム

- ・日本の企業での職場体験(入国制限が緩和された後に実施可能)

4、当社開催のイベントへの参加

- ・合同企業説明会
- ・企業との交流会
- ・企業訪問ツアー
- ・外国人向け就活セミナー

アルタイ国立大学 国際交流担当
副学長 RAIKIN Roman Ilyich

北海道大学と新潟大学による日露経済協力・人的交流人材育成に資するプラットフォーム(HaRP)におかれましては、日露の学術教育、技術、人的交流事業を効率的に取りまとめ、経験の蓄積を体系化し、優良事例を普及させる役回りを担っておられることと存じます。新型コロナウイルス感染拡大による制約のもと、2020～2021年の日露地域・姉妹都市交流年を実施する中で、HaRPの役割は非常に重要になったとも言えるでしょう。

アルタイ国立大学は日本との協力で40年間の歴史があり、生物学、天体物理学、考古学等の分野で共同事業を成功させてきました。また金沢大学等によるコンソーシアム「日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム」にも参加しています。2020年9月、本学は北海道大学とともに円卓会議「日露の大学・企業・自治体間のパートナーシップ - 地域の専門人材育成に関する先端的な取組紹介」を共同開催しました。円卓会議はアジア教育フォーラムの一部としてHaRPならびに日露大学協会の協力のもと実施され、200名以上が参加しました。今後の協力と優良事例の普及の方針については、興味深い議論の結果、共通の理解を形成することができました。

今日の世界的な潮流では、大学が地域の持続可能な社会経済発展を左右する中心として活動しています。社会が求める大学の役割は、研究開発の可能性や人材育成だけではなく、実際の経済分野で求められる成果を出し、知識と技術の応用によって社会を発展させることです。大学、学術機関、政府機関、ビジネスパートナーによるコンソーシアム形式の協力は、ロシア政府が2021年に開始した主要大学の新たな国家支援プログラム「Priority 2030」の優先項目にも合致します。また、大学は国際的なネットワークの中心としての機能を保持し、才能ある人材やインフラの資源を拡大させ、幅広い分野と学際性を提供し、総合的なプロジェクト実現の基礎を築きます。

アルタイ地方やアルタイ国立大学における日露の大学・自治体・企業の協力プログラムについて、日本のパートナーの皆様と次の分野で取り組みたいと考えています。環境にやさしい自然食品や薬品の原料生産と加工／生物多様性の研究／特別自然保護区の管理／中央アジアの民族の物質的・文化的遺産、民族起源論の研究／高エネルギー天体物理学／宇宙からの地球観測技術／北ユーラシアの気候研究／腫瘍性疾患の早期診断と免疫療法／地域の持続可能な発展／高リスク農業地域における最新技術の応用／サマースクール、ウィンタースクール形式による若手リーダーの共同育成。

最後にHaRPの事業成果に対し、感謝の意を表したいと思います。2020年は新型コロナウイルス感染拡大に伴い様々な制限がありましたが、HaRP事務局のご尽力のお陰で、協力関係発展の年となりました。アルタイ国立大学といたしましては、今後も積極的にプラットフォームの活動に取り組むことはもちろん、地域間協力のさらなる発展に向け、日露共同事業の推進を包括的に支援したいと考えております。

マクシーム タラーソフ
ハバロフスク地方行政府
投資・起業促進局長

今日の世界の経済関係は、新型コロナウイルスの感染拡大や政治的不安定、資源価格の変動という状況下で、かなり長期に亘り乱気流に揉まれています。このため、国家間で地域的な繋がりを発展させていくことが重要とされています。

ロシアと日本は隣国同士です。ロシア語には「遠くの親戚より近くの隣人」という諺があります。我々両国間の関係の安定性は、北東アジアというマクロ地域の情勢のみならず、世界全体の情勢にも影響を及ぼすものです。

この点を踏まえ、我々は両国の中小企業の交流発展に特に注力してきました。露日企業の協同が成功を収めるには、ビジネス環境だけでなく、両国の文化や提携先の経営プロセスの特性、製品要求事項やその他の要因の理解が必要です。これらの知識を導く助けとなっているのが、両国の大学間教育交流や企業インターンシップなのです。

その関連で言及したいのが、2017年10月にハバロフスクで日本の産学代表者を対象として行った訪日研修です。これは、ロシア連邦の大統領プログラム「企業経営者養成計画」という枠組みで実施されたものです。他にも、ハバロフスク国立経済法科大学における日系企業JGC Evergreen関係者向けインターンシップも良例として挙げられるでしょう。

更に、北海道大学と新潟大学が立ち上げた「日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」による二国間関係発展への貢献についても、触れないわけにはまいりません。このプラットフォームは設立当初より両国の大学や産官組織の連携にとって有意義な場となり、それは「露日地域・姉妹都市交流年」の実施に際してはとりわけ重要なことです。

喜ばしいことに、HaRP共同事業の実現はハバロフスク地方でも活発に進んでいます。ハバロフスク国立経済法科大学と北海道大学の交流拡大は、その一例です。中でも成功事例として挙げたいのが、2020年10月9日に行われた円卓会議「日露の大学・企業による共同人材育成事業－課題と展望」であり、この会議によって我々の関係は更に発展し、最も有望かつ興味深い協力分野に着目できました。

ですが、これらの成果に留まってはならないでしょう。HaRP事業関係の取り組みの実施は、露日協力の開かれた可能性の幅を示し、人的交流を発展させるための前提条件を確実に生み出しています。本事業はまた、産学関係者の可能性と展望を高め、そのモチベーションにも好影響を与えているのです。

最後に、ハバロフスク地方行政府および日本政府両機関による支援のもと、露日経済協力・人的交流プログラムの促進に携わっているHaRP事務局に感謝申し上げますと共に、同様の関係発展に期待しつつ、本稿の結びとさせていただきます。

平成26年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム
大学名	北海道大学
担当部署	学務部国際交流課
コンタクト先	RJE-3@oia.hokudai.ac.jp

2. プロジェクト概要

本プログラムは、極東・北極圏を対象として、北海道大学と連携先であるロシアの大学・研究機関において蓄積された環境、自然災害、民族・言語・文化等のフィールド研究による実績とそのネットワークに基づき、日露の参画大学と北海道や極東ロシアの自治体、産業界の代表などで構成されるRJE3コンソーシアム(East Russia-Japan Expert Education Consortium)を構築し、極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家集団を育成する取組みである。本プログラムでは、座学だけではなく、フィールドワークや分野横断的な学びを含む教育カリキュラムを通じて、多文化理解力・コミュニケーション力・企画、創造力が身につける。事業初年度から2019年度までの学生交流数は、合計で派遣学生156名、受入学生149名となり、本プログラムを通じた日露の学生交流は拡大してきている。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

本学にセントラルオフィス、ロシア側大学にリエゾンデスクを置き、国際運営委員会のメンバーにリエゾンデスクの事務担当者を含め、事務担当者も国際運営委員会に出席することにより信頼関係を築いてきた。今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、通常の入派事業を行うことができなかった反面、オンラインによる国際運営委員会や事業担当者による打合せを行い、プログラム運営の検討や意見交換を行った。

教育システム上の取り組み

基礎科目修了証と共同修了証の授与基準をつくり科目担当者による評価と、日露両方の指導教員による評価を行うことによって、成績評価の透明性と客観性を確保し、日露間の評価の質保証と標準化を図っている。国際運営委員会においてプログラム運営上の課題を検討し、対策を審議している。今年度は日露での単位認定に関する過去の記録を確認し、ロシアの単位・学位制度について調査を行なった。調査結果を踏まえて、日露間での単位共有化についての協議を行い、RJE3基礎科目にコンピテンスを明記することでRJE3科目のロシア側での単位を進めることに合意した。

令和2年度事業実施の成果

今年度は新型コロナウイルスの影響で、派遣受入事業が中止となり、ほとんどのフィールド実習を中心にRJE3科目を中止せざるを得ない状況となった。一方で、オンラインでの授業実施をロシア側大学が要望していることもあり、日露の教員による概論科目のうち8講義を動画作成し、オンライン授業として実施した。この取り組みを通じて、オンライン授業実施方法やオンラインでのグループワーク実施のためのノウハウを蓄積できた。参加学生からの授業評価については、アンケートを実施し、まとめており、次年度以降の授業計画の参考とする予定である。

コロナ禍による事業への影響・課題

派遣受入事業やフィールド型実習が中止となった。来年度もこの影響は続くことが予想され、オンラインでの授業や交流による参加者の学修充実を図る必要がある。コロナ収束後も、オンラインを併用した教育プログラムの運営を求める声がロシア側参画大学から寄せられている。今後、これまで開講してきた科目のデザインをオンラインを併用したハイブリット型の授業形態に再編していく必要がある。また新たな状況に合わせた新規の科目を開設する必要がある。

令和3年度以降の展望・方向性

令和3年度以降も、オンラインによる授業実施・共修、会議・打合せの実施が想定される。これに対応した機材や体制の整備が必要である。プログラム運営については、令和2年度の国際運営委員会で合意した本学とロシア協定校との間でのRJE3科目の単位共有化への取り組みを進める。また、この過程においてロシアが2003年に加盟したボローニャシステムに沿った単位・学位制度との比較検討を進め、RJE3科目をロシアに限らず、欧州などとの大学間でも共有できる国際プログラム化を進める予定である。この検討では、他の大学の世界展開力強化事業のプログラムとも協力して行く。オリンピック・パラリンピックが開催される場合には宿泊や交通などの手配が困難となる事が予想され、懸念事項となっている。

平成26年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露間における新価値創造人材の育成
大学名	東北大学
担当部署	総務企画部国際企画課
コンタクト先	kokusai-r@grp.tohoku.ac.jp

2. プロジェクト概要

グローバルな視点から日露両国間交流の意義と重要性を深く理解し、全球的観点で日露間の新たな価値を創造できる指導的人材を育成する目的で、本学と関係が深いロシアの特別大学である「モスクワ国立大学(MSU)」及び「ノボシビルスク国立大学(NSU)+ロシア科学アカデミーシベリア支部(SB RAS)」、「極東連邦大学(FEFU)+ロシア科学アカデミー極東支部(FEB RAS)」を交流組織として、①学部1・2年生を対象とした、相互の異文化理解を推進する短期学生交流、②学部3・4年生および博士課程前期学生を対象とした、単位取得を伴うプレ留学交流、③博士課程前期および後期学生を対象とした、日露で実施している高いレベルの共同研究を基盤とした大学院生の教育研究交流を実施し、これまで教育を中心としてきたロシアの大学、研究を中心としてきたロシア科学アカデミー(RAS)、また研究第一、門戸開放、実学尊重をモットーとする本学が三位一体となって段階的教育交流モデルを構築する。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

- ・本学ではロシア側コンタクトパーソンとの連携を強化し、共通認識、相互理解を心がけた。
- ・ロシアの大学(学士・修士課程)とRAS傘下研究所(修士・博士課程)における教育面での相互補完関係に着目し、両者と協力することで学生交流の推進を図った。
- ・研究所を巻き込むことで、より専門性の高いカリキュラムを学生に提供した。

教育システム上の取り組み

- ・学生が留学しやすい環境整備のため、 Semester制に替えてクォーター制を導入した。
- ・本学文学研究科心理学講座とMSU心理学部とのジョイントリー・スーパーバイズド・ディグリー(JSD)プログラム開発に際しては、単位の読み替えのため双方の授業科目内容を確認。JSDプログラムでのMSU博士学生受入れにあたっては、MSU側指導教員と協議の上、学生の研究テーマや履修科目を決定。教育の質および学生の成績は、本学における半年以上の指導内容、単位取得状況、論文の内容をもって指導教員ならびに受入機関で保証、認定する予定。

またJSD学生が受入機関において取得した授業単位を派遣元機関において必要とされる授業単位に含むことができるため、修業年限内での課程修了が可能であり、留学をキャリアプランに組み込むことができる。派遣元機関において学位を授与し、受入機関と派遣元機関による共同指導学位証を授与する枠組みを構築した。

・全学的に推進している博士前期・後期一貫の国際共同大学院において、本学理学研究科が主体となる環境・地球科学国際共同大学院プログラムでは、NSUを海外連携機関の一つとして認定した。各国際共同大学院では同様のカリキュラムが設定されており、博士前期及び後期修了時に学生の質を保証するためのQE (Qualifying Examination)を面接中心に行う。

面接は、海外の大学・研究機関の研究者も含めて英語で行うことで研究能力に加え、グローバルに活躍できる能力のある学生であることを保証している。なお、海外の大学からこの環境・地球科学プログラムに参加する学生には、東北大学で環境・地球科学特別実験Ⅱとして6か月以上滞在し研究することを義務付けた。(単位数は各国の事情に配慮し等価的に3単位に相当する単位)。

令和2年度事業実施の成果

令和2年度は、コロナの影響で実質的な交流ができなかった。

しかし、モスクワ大学心理学部の教員が1名、コロナの影響で帰国できずに仙台に滞在したことで、教員同士の密接な研究交流を行うことができた。今月中にはロシアの国内誌に共同執筆論文が掲載される運びである。なお同教員は、令和3年度より、日本学術振興会外国人特別研究員として本学文学研究科にて研究活動に従事することとなった。

コロナ禍による事業への影響・課題

コロナ禍によって人的交流がストップしたことは、受入にも派遣にも、多大な影響をもたらした。

2020年度に培ったオンライン授業のノウハウを、ハイブリッド型のプログラムに展開できないか、検討を進めたい。

令和3年度以降の展望・方向性

- ・MSU心理学部と、文学部・文学研究科が継続してJSDプログラムに特化した段階的プログラムを実施する。
- ・先述のとおり、令和3年度には、MSU心理学部の教員1名が日本学術振興会外国人特別研究員として本学文学研究科にて研究活動に従事することとなった。同教員はこれまでもMSU心理学部との交流プログラムの中心的な役割を担ってきた。令和3年度にも、引き続き密接に連携しながらプログラムの実施を検討する。
- ・文学研究科では、ダブルディグリーの可能性を模索する。
- ・本学において教育の国際化ならびに学生交流プログラムを全学的に企画・実施しているグローバルラーニングセンターと本学の学位プログラム推進機構がロシアとの交流プログラムについても引き続き実施する。
- ・コロナウイルス感染拡大は学生の受入れ・派遣に大きな影響を及ぼした。政府の水際対策の緩和が始まったものの、12月以降の感染拡大と緊急事態宣言発令もあり今後の受入れならびに派遣の見通しが立てづらいことが課題である。一方、2020年度に培ったオンラインでの受入れならびに派遣プログラムを一層拡充したり、ハイブリッド型のプログラムに展開することにより、大きな影響がないようにしていきたい。

平成26年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	自然科学と社会基盤学の連携による日露学生交流プログラム
大学名	東京大学
担当部署	経営企画部国際戦略課国際事業チーム
コンタクト先	intl-project.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

2. プロジェクト概要

自然科学と社会基盤学の連携による日露学生交流プログラム(STEPS(Students and Researchers Exchange Program in Sciences))では、以下の基本理念実現のため、ロモノーソフ記念モスクワ国立大学及びサンクトペテルブルク国立大学との学生交流事業を行っている。

- ・基礎科学分野、社会基盤学分野及び関連する分野における学術交流の促進
- ・将来の教育・研究分野における連携基盤の構築
- ・日露間にとどまらずグローバルに活躍するリーダー人材の育成

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

これまでに構築したSTEPSオフィスと両大学との連絡体制により、コロナ禍においてもロシア側大学と連絡をとっており、連携上の課題は特に生じていない。

教育システム上の取り組み

今年度はプログラムの実施に至らなかったことから、教育システム上の取り組みについて特に変更点はなかった。

令和2年度事業実施の成果

今年度は日露学生交流プログラムをはじめ、理学系研究科における海外派遣・受入を伴う学生交流プログラムの実施が停止中のため、事業実施に至らなかった。工学系研究科においても日露間の交流だけでなく、他国との一般的な協定に基づく交換留学制度についても、各種入国制限(受入)及び感染症危険情報のレベル指定(派遣)により実施することができなかった。

コロナ禍による事業への影響・課題

本プログラムの参加学生は、主に実験やフィールドワークを行うため、オンラインで代替することが困難だった。

令和3年度以降の展望・方向性

今年度同様、理学系研究科では運営費等の学内予算を活用し、既存の学内／研究科内の海外派遣・受入プログラムに組み込む形でロシアとの交流を実施する予定である。工学系研究科では、日本学生支援機構(JASSO)海外留学支援制度(重点政策枠)による支援枠の利用を検討している。

平成26年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露の経済・産業発展に資するグローバル医療人材育成フレームワークの構築(G-MedEx)
大学名	新潟大学
担当部署	学務部留学交流推進課
コンタクト先	intl@cc.niigata-u.ac.jp / 025-262-6935

2. プロジェクト概要

本事業は、日露の架け橋となって両国の医療を発展させ、さらには世界の医学の進歩に資する「グローバル医療人」を育成することを主目的とする。医科大学を中心に、ロシア全土に広がる全9校を相手校とする。交流する学部学生・大学院生には、先端的な知識や技術に加えて、過疎地などで必要とされる地域医療を習得させる。また、多国籍の患者や医科学者と協調するための俯瞰的な視点を身に付けさせる。プログラムは、医学部生を対象とした①「夏期医学生交流プログラム(双方向10日間)」および②「医学研究実習プログラム(双方向2ヶ月)」、そして大学院生を対象とした③「ダブルディグリープログラム(DDP)(受入)」と④「ダブルディグリーを伴わないレギュラーPhDプログラム(RPP)(双方向)」の4つを設定している。このうち、大学院生プログラムについては、問い合わせベースとし、参加希望があった場合に限り、実施する。

本事業は、医学部内に設置する「G-MedExセンター」が運営・評価・管理を指揮する。教育の「質の保証」のため、本学・国外の各運営委員会、それらから構成される国際連携運営委員会と本学事務局が協働している。また、派遣・受入学生のために、事前のガイダンス、宿舎の確保、母国語での学習・生活支援など、万全のサポート体制を備えている。その他に、帰国後の交流やキャリアパスも積極的に支援している。

以上により交流のノウハウや信頼関係を積み上げて、それらを他の学部へ波及させるように努めている。本事業により日露間の「人材の循環」を加速させることで、我が国の医療のみならず産業の発展に貢献していくことを目指している。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

昨年度からの大きな変更点はないが、協定校の教員で本学出身者がいる場合は、主なコンタクト先に指定し、煩雑な事務手続きや書類提出の窓口、緊急連絡先としての役割を担ってもらっている。日露ならびに本学の事情に精通するコンタクトパーソンを据えることで、学生の派遣・受入のみならず、日本留学海外拠点連携推進事業で進める留学フェアの開催等にも協力体制を構築しており、実質的な成果を挙げている。

教育システム上の取り組み

③「ダブルディグリープログラム(DDP)(受入)」では、4年間で日露双方の大学で計2本の博士論文を发表することとなり、医学の分野においては、極めて難しい状況である。こうした実態を鑑み、令和元年度以降は、入学試験を実施しておらず、新たな合格者は出していない。特に、実験を伴う場合、十分なデータを取得するために必要とされる時間が圧倒的に不足するため、今後、学生を受入れる際には、学生の専門分野を十分に絞る必要があると思われる。

令和2年度事業実施の成果

新型コロナウイルスの影響により、全プログラムで学生の派遣・受入がすべて中止となった。そのため、オンラインにて1)スクール、2)国際学生フォーラム、3)レクチャーが行われた。1)スクールでは協定校により英語を母国語としない医学生のための英語コミュニケーションや外科技術に関する知識の講義、国際ジャーナルへの論文の書き方のほか、学会でのプレゼンテーション作成や発表等の学びの機会が提供され、2)国際学生フォーラムではロシア協定校の選抜メンバーとともに本学学生が最も興味のあるテーマを中心に、それぞれプレゼンテーションを行い、質疑と意見交換を行った。3)レクチャーについては、本学では毎年複数回、日露で模擬講義や特別講義などを行ってきたが、本年度も3日間、計6回、双方向でオンライン講義を行った。これらの取組により、両国の学生に国際的な学びの機会を提供することが出来たと共に、新型コロナウイルスの影響により留学の機会が失われた学生にとって、オンラインでの交流はモチベーション維持につながったと考えられる。

コロナ禍による事業への影響・課題

上記のとおり、国際交流へのモチベーション低下、学生同士のコミュニケーションの機会の喪失等学生への影響が懸念される。オンラインで交流は行っているものの、国際交流へのモチベーション低下は避けられず、実際に現地へ行くことが出来ない中で、どのようにして学生の興味を引き出すかが課題となる。また、オンラインスクールでは、参加学生同士の交流が生まれにくく、オンラインでも休み時間での雑談やフリートークの時間を設けるなど、工夫する必要がある。さらに、ロシアも地域によっては時差が大きくなるため、実施時間に注意が必要である。

令和3年度以降の展望・方向性

令和3年度以降も医学科では対面での交流、特に病院や医療現場を舞台とした実習は、引き続き厳しい状況が続くと考える。今年度得た成果と課題を踏まえて、あらたな形での交流を、工夫し、充実させていく必要がある。すでに、オンラインレクチャーは毎年実施してほしいという要望が出ている他、例えば、オンラインでの臨床実習は、各国の学生が実際の症例を持ち寄り、実践的な検討会形式で実施する提案がすでに出ている。

また、オンライン医療英語など、継続的な基礎教育の取り組みも可能となるため、オンラインでの利点を活かしたプログラムも実施したい。

事業継続に関しては、医学科内に設置されたG-MedExセンターを中心に、引き続き事業を実施・管理・運営していく。事業全体の運営資金は学内予算の活用に加え、民間企業からの寄付などの獲得にも尽力する予定である。日露の教員交流も活性化させ、国際共同研究とそれに係る学生交流を積極的に進めていきたい。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム
大学名	千葉大学
担当部署	学務部国際企画課
コンタクト先	kokusai-grants@chiba-u.jp, 043-290-2044

2. プロジェクト概要

極東ロシアにおいて食料や種苗生産から高度施設園芸、植物工場までを通じて、流通・販売ビジネスまで含めた未来農業を理解でき、日露の共同事業に貢献できる人材育成を目的とし、大きく2つの領域でプログラムを実行する。第一は、未来農業の中心である「太陽光利用型植物工場」と「人工光型植物工場」における環境制御、栽培技術・管理、デバイス開発に関するプログラムであり、第二は有機農業を含む「太陽光利用型植物工場」と「人工光型植物工場」の生産領域の拡大、生産物管理、繁殖・育種、マーケティング、ライフサイクルアセスメント等に関するプログラムである。栽培・生産や環境に関わる領域だけではなく、工学やマーケティングに関するプログラムを学び、極東地域における日露共同事業の柱の一つとされている、温室ビジネスを始めとした農業ビジネスにおいて多様な場面で活躍できる人材を領域横断型のプログラムで育成する。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

細かい相談はロシア語が必須のため、特定の職員に負担が集中する傾向がある。今年度は年度当初よりSkypeやZoomを活用した、迅速かつ細かい相談を開始した。これにより、11月下旬の学生来日を実現させることができた。オンラインツールを介した双方向の講義については今後の課題もあるが、現在はZoomおよびMoodleを活用したものを試行している。

教育システム上の取り組み

昨年度より引き続き本事業に係るカリキュラム、科目構成を進めており、今年度は共同授業を10月より開講した(一部オンライン、一部対面)。中でも本学が開講した、GISを用いて土地利用図を作成するオンライン授業には、本学の学生と沿海地方農業アカデミーの学生が多数参加した。これに伴う受講科目の単位認定は昨年度と同様に行っており、ロシアからの参加学生は受入大学(千葉大学)からプログラム修了証と、受講科目の単位が授与されている。派遣元である沿海地方農業アカデミー、サハリン総合大学、ノボシビルスク農業大学、極東農業大学では、この本学の単位を自機関の単位に読み替えて単位付与している。今後はロシアの各大学で開講するオンライン授業の内容について実施相談を行う予定である。また、対面プログラムでは11月下旬から半年間、沿海地方農業アカデミー、サハリン総合大学、ノボシビルスク農業大学、極東農業大学の学部3、4年生と修士学生の受入れを行っており、現在受講科目の調整を進めているところである。

令和2年度事業実施の成果

昨年度から継続して、本プログラムの内容を多くの日本企業に紹介する取り組みを進めている。本年度はこの一環として、2020年2月末に蜂蜜・養蜂にかかわるフォーラムを開催する予定で準備を進めていたが、2月後半の日本におけるコロナ禍の急速な感染拡大により、多くの参加者の来日を見合わせる事態となった。しかし、ノボシビルスク農業大学およびノボシビルスク州の関連企業の日程調整がつき、当該企業等の来日を実現したことから、日本の関係企業と日本における蜂蜜の輸入に関わる体制、流通やブランド化の取り組み、ITを活用した農業経営ツールとして開発されたファームレコードなどの先進的な技術に関する紹介や意見交換など、実りある交流の場を設けることが出来た。なお、来日予定だった参加者を含めた、蜂蜜に関わるフォーラムについては改めて2021年度に行うことを予定している。またこれとは別に、本年度(2020年度)中に、極東ロシアとの農業に関連する課題やそれに対する解決策の共有などを目的として、ロシアの大学との間で「日本極東ロシア農業シンポジウム」のオンライン開催を検討しているところである。

オンラインでの授業実施、交流会の開催については、2020年度は各大学との相談を5月以降に開始し、10月以降にオンラインプログラムを実施している。12月にはロシアより学生が来日し、日本での対面プログラムにも参加するなど、コロナ禍においても継続した学生同士の交流も引き続き行っている。

コロナ禍による事業への影響・課題

元々学生派遣を伴うプログラム実施を予定していたが、今年度は大学の方針により学生派遣が行えなかったことから、Zoomを介したオンライン交流を2回行った。まず11月に開催したオンライン交流会には、本学の学生9名と来日したロシア人学生5名が参加し、ロシア語と日本語で各自の専門についてプレゼンテーション及び意見交換を行った。また、12月に実施したオンライン交流会では、本学の学生9名とサハリン総合大学日本語学科のロシア人学生20名が、設定したテーマに沿ってロシア語でプレゼンテーションを行い、闊達な意見交換を行うことで相互理解を深めた。また、オンラインでの専門プログラムとして、11月～12月に、沿海地方農業アカデミーの学生12名、本学の学生8名が参加して、衛星画像を利用した土地利用図の作成に関わる授業(2単位)を実施した。学生受け入れについては、11月下旬にロシアから6名の学生が来日、12月より未来農業に関する対面プログラムを開始している。なお、来日したロシア人学生6名は、来日前の10月初旬より、本学で開講されている日本語クラスのオンライン授業(Moodle)を、3名は園芸に関わる英語の授業2科目(Moodle)をそれぞれ受講している。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

補助金の交付期間中に、各大学、関連企業との信頼関係を構築すると同時に、多様なインターンシップの枠組みを検討し、関係産業の企業との連携を進めたい。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露人的交流の飛躍的拡大に貢献するTUFSD日露ビジネス人材育成プログラム
大学名	東京外国語大学
担当部署	国際化拠点室
コンタクト先	五十嵐 耕大 (メール:kokusai-kyoten@tufs.ac.jp、TEL 042-330-5534)

2. プロジェクト概要

言語力、ロシア及び日本に関する教養・知識、経済についての知見、交渉力・調整力を合わせもち、日露協力プランの第8項目「両国間の多層での人的交流の飛躍的拡大」に結び付く、多様な分野で活躍することが期待される高度な「日露ビジネス人材」を養成するために、ロシア6協定校(モスクワ国立大学、モスクワ国立国際関係大学、ロシア国立人文大学、国立研究大学高等経済学院、サンクト・ペテルブルグ国立大学、極東連邦大学)と連携しつつ、①短期留学 ②長期留学 ③インターンシップからなる交流プログラムを執行し、各大学が行っている「ロシア関係」「日本関係」「実学的な経済関係」の教育をさらに強化する。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

各々のロシア協定校との交流窓口役を担っている本学のロシア関係教員、留学生課、国際化拠点室、プログラムコーディネーター及びモスクワへの現地コーディネーター配置により、ロシア側との円滑な調整を可能にしている。

教育システム上の取り組み

「RJIプログラム」の整備:国際日本学、国際ロシア学、インターンシップの3つがセットになった本学独自のプログラムであり、本事業に参加する本学学生が履修を求められている科目・講座名、必要単位数が具体的に明示することにより、日露ビジネス人材を目指すうえで取り組むべき事柄を明確にしている。

令和2年度事業実施の成果

- ・実学教育強化への取組である、「日露ビジネス講義」(日露ビジネス経験者によるリレー講義)、「駐在員のロシア語」(ビジネスロシア語)をオンラインにて実施し、所期の目的を果たすことができた。
- ・タンデム学習、国際日本学、字幕翻訳演習から成る、2週間に及ぶサマースクールをオンラインで実施した。日露の学生約30名ずつが参加し、オンラインながら交流を伴う学びの場とすることができた。
- ・事業参加型インターンシップとして企画した日本アニメの上映プロジェクト「J-ANIMEMEETING」を2020年11月14、15の両日オンラインで実施した。2019年秋から準備を開始、本学を含む日本の7大学、ロシアの6大学(うち本学の協定5校)の学生79名(本学から22名)が参加し、主催者の日本映像翻訳アカデミー(株)による指導・監督のもと、ロシア語への字幕翻訳やPR活動、上映会運営に主体的に携わり、貴重な就業体験を持つことができた。

コロナ禍による事業への影響・課題

(影響)

- ・渡航を伴う短期留学について、派遣も受入も実績ゼロとなった。代替策として前述のオンラインによるサマースクール(2週間)を実施した。
- ・長期派遣の実績はゼロであったが多くの学生が留学予定先のオンライン授業を聴講した。一方、長期受入はコロナ禍にもかかわらず8名を記録した(計画15名)。
- ・インターンシップの機会が著しく減少した。

(課題)

- ・留学とインターンシップ機会の確保継続

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

本事業での新たな取り組みを可能な限り継続していく。

- ・TUFSD日露ビジネスネットワークのサポートのもと、ロシア及び日本国内でのインターンシップの機会提供、実学教育関連の講座を続けていく。
- ・本学学生、他教育機関(大学のみならず小中高含め)と留学生を介した交流、地方自治体などローカルコミュニティーとの連携を深めていく。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム
大学名	東京工業大学
担当部署	学務部留学生交流課
コンタクト先	E-mail: ryu.kor3@jim.titech.ac.jp

2. プロジェクト概要

本事業では、健康・医療産業や原子力・エネルギー産業に資する中心的な科学技術である生命工学、医用工学、環境科学、原子核工学分野における日露間の産業発展に寄与できる若手技術系人材の育成を、東工大とモスクワ大学(MSU)およびロシア国立原子力研究大学(MEPHI)と共同で実施する。本学の工学院、物質理工学院、環境・社会理工学院、生命理工学院と言った複数の学院に跨るライフエンジニアリングコース、原子核工学コース並びに生命理工学コースが中心となって、本学の学生派遣プログラム、ロシア側大学の学生受入プログラムの実施、並びに日露の工学分野交流を目的とする日露学生交流フォーラムを開催する。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

本学、ロシア側大学であるMSU並びにMEPHIの参加大学の運営メンバーは固定しており、プログラム運営に十分な意思疎通が図れるようになっている。ロシア側大学との調整・連携の論議は、例年学生交流フォーラム実施時、TV会議システム、必要に応じた打合せ出張により実施していたが、今年度はコロナ禍のためFace to Faceの打合せはできず、メールの他、適宜ZOOMシステムによるオンラインにて実施した。

教育システム上の取り組み

本学では、派遣プログラムの参加学生には希望に応じて履修認定される科目があるが、今年度は実施できなかったため、代替としてMSUと双方の学生の混合チームによるグループ討論会をZOOMにて実施し、これを本学の学外研修科目に認定した。参加学生の希望者には単位認定を行った。またZOOMのオンラインシステムを活用し、MSU教員による講義を本学の特別講義科目として(100分×7回)実施し、レポート提出のもとMSU教員が評価をして単位認定した。

令和2年度事業実施の成果

オンラインによる、3回の日露学生交流フォーラムを開催した。これまでの学生派遣・受入時と同様に、学生・教員の研究発表、学生のグループワーク討論会を行った。特にオンライン開催の特徴を生かし、従来は時間的制約により参加が難しかった「過去に本交流プログラムに参加した日露の卒業生による近況報告」も実施し、本学生交流の高い参加意義等が報告された。また昨年度の学生交流並びに教員間の連携打合せを通じて、本事業を契機として採択されたロシア・CISからの学生を含む、国際大学院プログラム(IGP(A))に、MSUから3名の入学希望学生の応募を受けるに至った。

コロナ禍による事業への影響・課題

事業活動の柱である、移動型の学生派遣・受入による交流事業はできなかった。その代替活動として”日露学生交流フォーラム”をオンラインで複数回実施した。オンラインシステムを利用したシンポジウムの開催や教員による遠隔講義の実施、遠隔研究指導がスムーズになされるようになったのは良かった点として挙げられる。今後は、実交流をベースにオンラインシステムの効果的併用が期待される。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

本事業を通じて、MSU並びにMEPhIとの連携の枠組みは既に構築されている。その枠組みを利用して今後とも、学生交流を継続実施する予定である。費用面ではJASSO等の学生奨学金制度の活用を考えると共に、本学の既存国際交流制度にのせることにより、事務等のサポートも含め継続的に実施していく。さらに実施合意または進行中の共同研究、並びに採択された国費留学制度もベースに、ロシアとの学術交流を活発化させ継続していく。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム
大学名	金沢大学
担当部署	国際部国際企画課国際化推進係
コンタクト先	g-planning@adm.kanazawa-u.ac.jp

2. プロジェクト概要

本学とロシア側連携機関とのこれまでの研究者交流を学生交流へと展開し、専門知識に加え、異文化受容性、現状認識力、俯瞰的思考力、創造(想像)力、そして実践力を備えた、将来の日露関係を担う人材育成を行う。そのため、体系的で多層的な、質の保証された骨太の交流プログラムを構築し、学生交流の規模を抜本的に拡大するとともに、プログラムに地域住民・地域企業との交流を組み込むことで、将来的な地域間の「学術・文化・経済」交流への展開を図る。本事業を通じて、東洋と西洋を結ぶ「21世紀の知(価値)のロシアン・シルクロード」の実現を目指す。

下記4つの単位・学位取得型交流プログラムを構築する。文化交流プログラムでロシアに対する興味を促し、継続的なフォローアップを通じて、専門・大学院課程での研究ベースの交流プログラムへの参加を促す。

- ①文化交流プログラム(体験交流・単位取得型):ロシア・日本に対する興味喚起を目的とした学士課程学生を主対象としたプログラム。
- ②基礎科学交流プログラム(学位・単位取得型):低温物理学分野で、博士前期課程におけるダブル・ディグリー・プログラムと単位互換プログラムを実施。
- ③先端科学技術交流プログラム(企業人材育成・単位取得型):実学的な分野である機械工学と情報科学、環境科学分野で、主に博士前期課程の学生を対象に、今後の地域間企業連携を見据えた、企業でのインターンシップ等を組み込む。
- ④先制医療交流プログラム(研究交流・単位取得型):脳神経科学、予防医科学、がん医科学、循環医科学分野における博士課程の交流プログラムを実施。理化学研究所、カザン連邦大学と連携して、将来的には日露医学研究教育センターの開設を目指す。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

■指導教員のミスマッチ

派遣学生の指導教員について、通常、派遣先大学に適切な指導教員を見つけてもらうようにしているが、学生の研究分野とマッチングしないことがあった。オンラインジョイントシンポジウムへの参加を機に日露双方の教員・学生がお互いの研究分野への理解を深めたことで、間接的にマッチングの改善につながった。

■会計上のWithコロナへの対応協議

新型コロナの影響で郵便物の配達が止まる、ロックダウンで先方との連絡が取れなくなるといったこれまでに見舞われた。このため、会計担当部署との協議により署名の省略を可とするといった、Withコロナに即した新たな手続きを取り決めた。

教育システム上の取り組み

カザン連邦大学とのダブル・ディグリー・プログラムについては、今年度は2020年度は1年生が1名、2年生が2名の計3名が渡日の予定であったが、新型コロナウイルスによる人的交流の制限により全て渡航中止となった。また、本来であればダブル・ディグリー・プログラムを数物分野に拡充する予定であったが、こちらも同じく新型コロナウイルスの影響により具体的な計画を検討することができていない。

令和2年度事業実施の成果

■ロシア同窓会のメンバー拡充

本事業の成果である人的ネットワークを確固たるものとして維持・活用するため、「金沢大学ロシア同窓会」を設立し、世界展開力事業ホームページ内にページを設けた。また、前述のジョイントシンポジウムにおいても周知を行い、現時点で50名弱のメンバーを得ている。今後も周知し更なるメンバーの獲得に向けて活動を続けていきたいと考えている。

■オンライン形式による新たな交流の模索

新型コロナウイルスの影響により日本～ロシア間はほぼ通年で人的交流の一切が制限されていることから、今年度は全てをオンラインで行った。オンラインという参加しやすい形態であるおかげか、各プログラムの参加者数は概ね増加傾向であった。

また、オンラインイベント形式でジョイントシンポジウムを開催した。第1部としてロシア同窓会設立記念事業を、第2部として世界展開力事業を構成する各プログラム毎のシンポジウムを行う2部構成とした。活発な意見交換が交わされ日露間双方の理解が深まったほか、これまでの参加者を上回る320名の参加者を得た。今回は全国からの視聴を確認することができたのが特徴的であった。

コロナ禍による事業への影響・課題

今年度は事業のほぼすべてをオンラインで行うこととなった。人的移動がないため移動費等の旅費は大幅減となった一方、オンライン環境整備やオンライン講義向けの教材作成や業務委託等、これまでになかった支出の大幅増ともなった。

どのプログラムにおいても、参加障壁の低さのおかげか概ね参加者増となった一方、参加者のモチベーションの維持や動向の把握とフォローアップの難しさを感じた。これらをどのように改善していくかが今後の課題である。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

■日露医学教育研究センターの設立

日露間の医学分野での交流をより強固なものとし、ひいては日露の医療従事者・研究者育成プログラムへと発展させるための礎として、日露医学教育研究センターを設立する。

■経費負担

現在、派遣・受入れプログラムに参加する学生の航空券費用は、補助金から支出している。補助金終了後を見据え、連携大学と航空券等の費用負担に関する交渉を引き続き行っている。

■事業終了後の展望

これより自走化委員会を発足し、現在施行中の各プログラムについて事業終了後もどのように継続していくかを委員会で検討していく予定である。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露の大学間連携による災害・被ばく医療科学分野におけるリーダー育成事業
大学名	長崎大学・福島県立医科大学
担当部署	長崎大学生命医科学域・研究所事務部学務課(大学院担当)
コンタクト先	e-mail:dai_med@ml.nagasaki-u.ac.jp TEL:095-819-7009

2. プロジェクト概要

本補助事業ではロシア及び日本が持つ放射線災害の経験, 教育インフラを糾合し, 両国のみならず世界において「放射線災害を含む大規模複合型災害を想定して, 災害発生前の防災計画等から, 発災期の緊急放射線被ばく医療を含む医療対応とクライシスコミュニケーション, その後の収束期から復興期におけるリスクコミュニケーションや保健活動などをはじめとする種々の災害対応等において, 災害サイクルに応じて対応できる人材」の育成を行う。

具体的には, 長崎大学, 福島県立医科大学及び北西医科大学等の間で学生を派遣・受入し, 放射線防護学, 再生医療学, リスクコミュニケーション学及び被ばく影響学といった分野の講義受講により単位の互換を行う。さらに長崎大学・川内村復興推進拠点及び福島県立医科大学における実習などにより単位互換の拡大を図り, 最終的にはダブル・ディグリー・プログラムを確立する。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

本事業に参加する長崎大学, 福島県立医科大学, ロシア連邦の北西医科大学で, 昨年から引き続き, 本年度は5回オンライン会議を実施した。オンライン会議を通じて, 本事業の大きな目標であるダブル・ディグリー・プログラムの開始に向け, 現在, 日露双方でダブル・ディグリー・プログラム構築に向けた合意書の作成, カリキュラムの構成, 互換科目の単位数及び入学試験時期等を検討している。2021年秋入学より開始予定ではあるが, ロシア教育省が定めたネットワーク教育プログラムという制度に則る必要があるため, 現在, 本制度とのすり合わせを行っている。

教育システム上の取り組み

本年度は, 世界的なコロナ感染症の拡大により日露間での学生の派遣・受入ができなかったため, オンライン授業を本格的に開始した。オンライン授業を開講する上で, 諸外国と日本の時差を考慮した時間割を構成し, リアルタイム形式とオンデマンド形式を併用して授業の配信を行うことで, 今まで仕事や経済状況によって海外移動が叶わなかった学生も母国で受講がしやすい状況となった。

例年どおり集中講義として開講している英語開講科目については上記で述べたとおり, 日本もしくはロシアへ渡航できない学生が在住する地域の時差を考慮して開講するため, 社会人学生にとっても柔軟に対応可能である。更に, 令和2年10月に福島県双葉郡川内村でオンライン形式で実施した「長崎大川内村実習(Advanced Risk Communication and Management)」については, オンラインであることから, 世界各国からアクセスが容易であることを生かして国際セミナーとしても開講した。結果, 北西医科大学より6名, 本専攻

より7名(長崎大学6名, 福島医科大学1名)の修士学生がオンライン実習を共修し, 諸外国からはヨーロッパに所在するIAEA, WHOなどの機関等及び大学から約120名の専門家や有識者が参加した。12月には, 北西医科大学の6名及び本専攻の7名の学生がICRP副委員長であるジャック・ロシャル教授による「放射線防護学 I・II」(2単位)のオンライン講義を各自の国より共修した。更に令和3年2月に, 本専攻の7名(長崎大学6名, 福島医科大学1名)の修士学生が北西医科大学が英語で開講する「生物統計学」(2単位)を受講し, 北西医科大学担当教員による成績評価に基づいて, 福島県立医科大学の疫学と単位互換を行う。

今後, 更にオンライン授業の環境整備を推進し, 外国大学との距離の弊害を解消することがダブル・ディグリー・プログラム構築の重要な取り組みと考える。

また, 北西医科大学の入学月は9月, 長崎大学の入学月は10月、福島県立医科大学の入学月は4月と, 入学月に相違があることについても今後調整が必要となる。

令和2年度事業実施の成果

教育システム上の取り組みで述べたとおり, オンラインを通じた講義及び実習を実施したことが大きな成果である。

また, オンライン授業により開講した, 令和2年10月の実習兼セミナーでは, 東日本大震災で実際に被災した方のインタビュー, 東京電力廃炉資料館の施設案内, 地元住民が日常で利用している食品検査場で食べ物の放射線量を計測する場面などを紹介し, 日露の学生をはじめ多くの外部の参加者より, 高い好評を得ることができた。更にセミナーを通して参加者より本学への留学を検討している旨の連絡もあった。

令和2年11月にオンライン上で開催された中央アジアを対象にした日本留学フェアにて, 本学の教員による本事業の概要及び取り組みや留学生による日本での修学及び生活についてプレゼンテーションを実施したところ, 参加者より入学に関する問い合わせ等があり, 対応に至った。

コロナ禍による事業への影響・課題

渡航による学生の派遣及び受入れができなかったため, オンライン授業が主体となり, PC等の配信機材の調達, 授業を行う際に時差を考慮した日程調整, オンデマンド配信のためのクラウドの確保等の対応が急務であった。

また, オンラインシステムを利用した授業(講義・実習)及び本事業運営に関する会議の際, インターネット環境による音声や映像の乱れの改善が課題である。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

令和3年度は, ダブル・ディグリー・プログラム構築に向けて, 長崎大学, 福島県立医科大学, 北西医科大学間で学術交流協定書及びダブル・ディグリー・プログラムの覚書の締結を行う予定である。ロシア政府が令和4年度より始動する教育枠組みネットワーク教育プログラムの内容に沿ってダブル・ディグリー・プログラムの展開を検討する。

補助金終了後は, 学内外の留学支援制度を利用し, 留学生の派遣・受入の金銭面でのサポートを継続していく。

また, 本専攻及び北西医科大学の学生同士が, 双方の大学間で開講するオンライン講義を通して交流を図る。オンライン講義の拡充及びオンデマンド形式での講義で, より受講希望者を増やし, 相手校の講義を受講できる科目を増やすことで継続して実施できる体制を努める。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成 -主に極東地域の経済発展を目的として-
大学名	東海大学
担当部署	国際教育センター
コンタクト先	国際教育センター 田牧陽一 tamaki.y@tokai.ac.jp

2. プロジェクト概要

本学の過去50年に亘る学生交流を柱としたロシアとの交流実績を最大限に活用し、日露間の関係深化と経済発展に資する人材の育成を目的とする。日本とロシアの両国に共通する社会問題であり、2016年12月の日露首脳間で合意された経済協力項目に盛り込まれた「健康寿命の伸長」と「高いQOL(Quality of Life)を保つ健康長寿社会の創出」を担うライフケア人材を育成するのを目的とする。主な事業は以下のとおり。

- (1) 海外研修(2～4週間／双方向)：入門レベルと位置付けて学生の相互理解と関心を喚起する。
- (2) 中期・長期交換留学(6/12ヵ月／双方向)：単位取得型、グローバルプログラム科目群の履修を含む。
- (3) 健診人材実務者研修(3～6週間／双方向)：ロシアで開設が進む画像診断、健診センターの実務者研修で、産学連携事業として実施する。
- (4) ダブル・ディグリープログラム(学位取得型)：大学院研究科レベルでの単位の相互取得を目指す。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

日露大学協会の枠組みを中心として、本学が長年交流委実績のあるモスクワ国立大学や極東連邦大学との連携関係を深化させるべく、事業を遠隔(オンライン)で企画・実施しコロナ禍のなかの困難な状況においても円滑な運営をはかっている。

教育システム上の取り組み

本事業の一環として学内的に整備した「グローバルプログラム科目群」26科目をUMAPに登録し、海外の大学に対しセメスター留学の門戸を開いた。これは日露人材交流委員会で現在検討を進めているECTSを介した日露大学間の単位互換を視野に入れた取り組みである。しかしながら2020年度はコロナの影響などにより海外からの受講者をいなかった。

令和2年度事業実施の成果

派遣プログラムの全面的なオンライン化を実施し、全てのプログラムの実施の目途が立った。受入プログラムについては、短期で実施予定のプログラムはすべてオンラインでの実施に切り替え、中期・長期の枠組みで実施されるものは、万全の感染対策を取ることで、来日を実現することができた。

コロナ禍による事業への影響・課題

当初計画を変更して、授業のオンライン化を実施した。新型コロナウイルス感染症による感染症危険情報の発出により、学生のロシアへの派遣は断念せざるをえなかった。ロシアよりの学生受入は、限定的に中期・長期交換留学(受入)で実施したが、水際対策の強化により、短期の枠組みでの再開の見通しは立っていない。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

本事業を先行事例として、①2022年度に予定されるカリキュラム改変と組織変更を見据えて、全学的なグローバル教育・研究環境の拡充と発展、②外国人留学生によりやさしい在留管理体制の実現、③派遣留学プログラムの拡充、④海外連携大学との間でオンラインによる授業の相互履修・単位互換の推進、⑤大学院研究科レベルにおけるダブル・ディグリープログラム、などの施策を実施していく。

平成29年度採択校

大学の世界展開力強化事業(ロシア)採択校 情報共有シート(令和2年度)

1. 基本情報

構想名	日露間で活躍できるモノづくり中核人材の育成
大学名	近畿大学
担当部署	グローバルエデュケーションセンター
コンタクト先	06-4307-3081

2. プロジェクト概要

大学間協定に基づく学生交流を実施

「日露間で活躍できるモノづくり中核人材の育成」プログラムは日露間で事業展開するモノづくりを中心とした企業において製品開発プロジェクトを推進でき得る人材の養成を目的として、本学と学術交流協定を結ぶロシアの10大学との間で展開する教育プログラム。

当該教育プログラムは①短期人材交流プログラム(2週間/双方向)、②交換留学プログラム(1セメスタ/双方向)、③学位プログラム(修士:2年、博士:3年/東大阪モノづくり専攻への受入のみ)の3層で構成され、これら全てにおいて企業での研修を実施している。②では、ロシア協定校と人材ニーズを十分に反映した協同教育の企画・運営を行い、協同教育プログラム委員会の設置等、単位互換・ジョイントディグリーの可能性を検討する。ロシアに留学する学生に対しては初等ロシア語教育、危機管理教育等の渡航前教育を十分にを行い、ロシアからの受入学生には日本語・日本文化研修等を人材交流の一環として実施している。

3. プロジェクトへの取組状況

ロシア側大学との調整・連携上の課題及び工夫点

ロシア側大学との調整・連携を行うために、近畿大学日露人材育成プロジェクトオフィスを設置し、本学グローバルエデュケーションセンターおよび理工学部と連携して日本とロシアの学生の要望に即応できる十分な連絡体制を備えている。

教育システム上の取り組み

交換留学プログラムおよび学位プログラムにおいて受講科目の単位認定が行われる。ロシア人学生には、「エンジニアリングデザイン実習」「理工学国際ゼミナール」(2019年度新設)が必修科目と位置付けられ、ルーブリックに基づいた単位の認定が行われ、質の保証が担保された17単位を下限とする履修プログラムとなっている。すなわち、ルーブリックに挙げたエンジニアリングデザイン能力の評価項目を高いレベルで達成するような教育指導が行われる。さらに両科目ともに、本学の学生と区別なく厳格な評価が行われる。また、ロシア人学生は個々に研究室に所属し、それぞれの専門に応じた課題の指導を教員より受ける。さらに、本学で開講されている留学生用の日本語科目、日本文化に関する科目も履修・受講。交換留学生一人ひとりに本学の大学院生を中心としたチューターを配し、履修指導、課題作成・提出等のサポートを実施。交換留学プログラムではグローバルエデュケーションセンターが理工学部からの単位認定報告を受け、プログラム修了書を発行、受講生に授与する。

ロシアの経済情勢に精通した大学教員、モノづくり企業の技術者、他大学の教員等で構成される外部評価委員会を組織・開催し、ロシアの製造業のニーズ把握とともに、科目の質の客観評価を行っている。本学からの学生の留学においては、学内公募に応募してきた学生にロシアでの学修計画を提出させ、プログラム運営委員会が留学の是非を審査する。留学が認められた学生は、本学で渡航前教育と初等ロシア語科目、協定校で「国際プロジェクトマネジメント実習」(2019年度新設)を受講し、帰国後に成果報告プレゼンテーションを行うことにより最終的な単位認定がなされる。

令和2年度事業実施の成果

大学院学位プログラム(ものづくり専攻)での受入開始

本年度より、本学大学院ものづくり専攻にて、ロシア人学生2名の受入を開始した。2名はそれぞれ修士課程および博士後期課程の大学院生として、学位取得を目的に、ものづくり企業でのインターンシップと研究活動を組み合わせたプログラムで学んでいる。

コロナ禍による事業への影響・課題

例年実施していた交換留学および短期人材交流プログラムが実施できていない。代替として一部オンラインプログラムを実施しているものの、ものづくりのリアルな現場を体験できないことが課題である。

補助金終了後を見据えた令和3年度の事業実施計画・令和4年度以降の展望・方向性

本学は、国際化推進の基本戦略である「近畿大学国際化のビジョン」に基づき、地域発展と国際社会に貢献できる人材育成を目標にグローバル化を強力に推進している。そして、この目標を達成するための1つの事業として、本事業の教育プログラムが進められている。従って、補助期間終了後、本事業は既存事業との交流や発展的な融合等を行い、継続的な内容として実施できるシステムへと再構築される予定である。



日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム

Human Resource Development Platform for Japan-Russia Economic Cooperation and Personnel Exchange

<https://russia-platform.oia.hokudai.ac.jp/>

